

はじめに

平成12～15年度子宮がん集団検診報告

長野県健康づくり事業団 子宮がん集団検診委員会
委員長 野口 浩

長野県における子宮がん集団検診は、県衛生部の事業として昭和45年にスタートし、平成11年度から、現在の長野県健康づくり事業団に委託され、運営されています。

当初、検診車2台での検診を開始し、その後、受診者数の増加に伴い増車が進み、現在では4台の検診車が稼働しております。当時は、検診車による検診が主体でしたが、近年、施設での検診が徐々に増加し、昭和63年頃には両者がほぼ同数となり、現在では施設検診が6割程度を占めております。主に都市部においては施設検診、産婦人科医の過疎地区となる地域では検診車による検診が行われています。

子宮がん集団検診は、発足時から県下の全産婦人科医が参加するシステムをとって参りましたが、開始から約30余年の月日を経て、第一線に働いてきた医師の高齢化、診療所の減少、さらに医学部新卒者の産婦人科離れもあり、その結果、基幹病院での勤務医の減少、分娩も一部病院に集中するなど医師が検診に携わる時間も確保出来ない事態も発生しています。当検診において欠く事ができない産婦人科医の確保が少しずつ困難になってきており、地域によっては検診医の確保に四苦八苦している現状です。

現在、病院等を退職、退官された10名ほどの産婦人科医の協力をいただきながら検診事業を行っておりますが、将来に向けての事業運営は非常に危惧される状況です。今後に向け、施設検診の比率を高めることも重要な手段かと思いますが、長野県は広く、産婦人科医の過疎地も増えており、検診車による検診の必要性も依然高いと思われまます。

集団検診を取り巻く状況は、益々厳しさを増す事も予想されますが、今日まで素晴らしい成績の得られている長野県の子宮がん検診を更に充実したものに出来るよう、健康づくり事業団、産婦人科医会が今後も協力し合っていきたいと考えております。関係の方々の一層のご支援ご協力を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

写真



婦人科検診車写真(上) ・ 検診車車内写真(下)



目 次

はじめに	
写 真	
目 次	
I 長野県衛生部による子宮がん集団検診実施状況	1
II 子宮がん集団検診実施体制の概要	2
III 子宮がん集団検診実施状況	3
A 検診体制	3
B 子宮がん集団検診の流れ	3
C 細胞検査（細胞診）	4
D 年度別にみた子宮がん集団検診結果	5
E 年度別にみた発見子宮がん	6
F 年度別にみた子宮がん集団検診細胞診実施状況	6
G 年代別にみた子宮がん集団検診細胞診実施状況	7
追跡調査協力医療機関	
IV 子宮がん集団検診発見子宮がん追跡調査一覧表	9
V 確定子宮がんの分析	11
A 調査成績	11
1. 確定子宮がんの年度別分布	11
2. 確定子宮がんの年代別分布	12
B 疫学的分析（問診データ集計）	13
1. 血縁のがんの有無	13
2. 既往歴（婦人科疾患）	13
3. 自覚症状の有無	13
4. 受診歴	13
5. 初潮年齢	14
6. 初婚年齢	14

7.	初産時年齢	14
8.	妊娠回数	14
9.	分娩回数	15
10.	自然流産の有無	15
11.	人工流産の有無	15
12.	閉経年齢	15
C	臨床的および病理組織学的分析	16
1.	細胞診判定	16
2.	進行期分類	17
3.	受診歴と進行期分類	18
4.	組織分類	19
5.	手術の術式（術名）	20
6.	進行期分類と手術の術式	21
7.	組織分類と手術の術式	22
8.	受診歴からみた年代別受診者構成と確定子宮がん	23
VI	平成12～15年度発見子宮がん追跡調査結果	25
VII	子宮がん集団検診使用様式	29
①	子宮がん検診申込書	30
②	婦人（子宮がん）検診票	31
③	乳房・子宮セット検診票	32
④	診療依頼書（子宮検査票）	34
⑤	子宮集団検診受診者連名簿	35
⑥	子宮頸がん検診追跡調査票	36
VIII	子宮がん集団検診委員会委員名簿	37

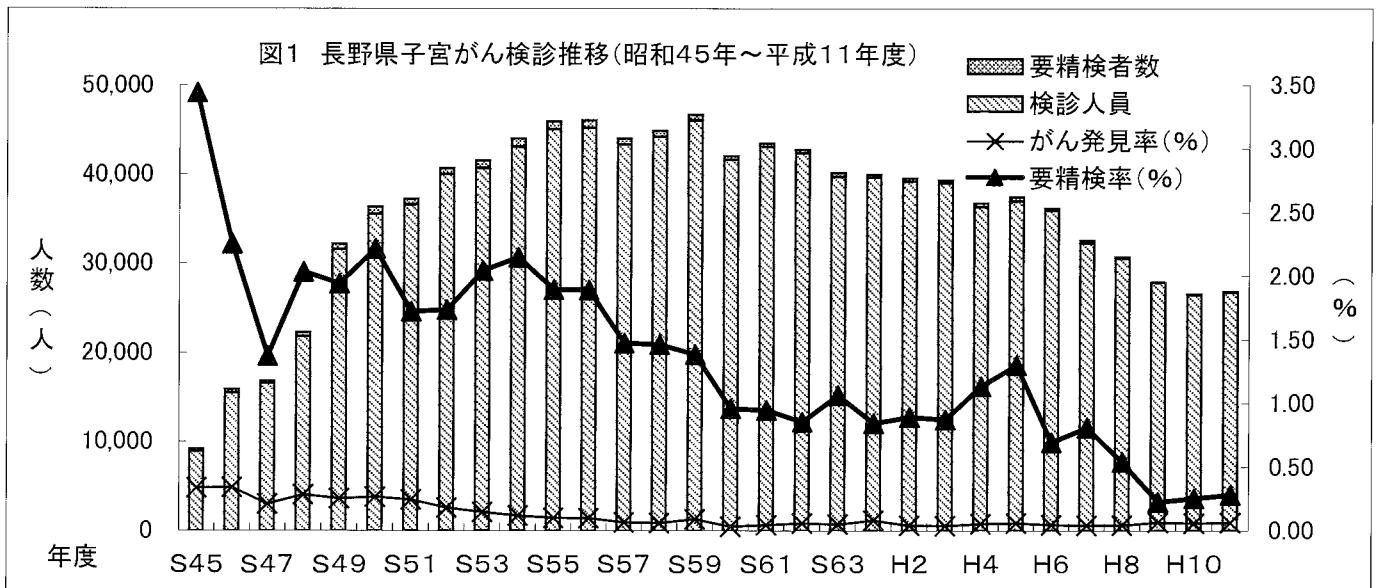
おわりに

I 長野県衛生部による子宮がん集団検診実施状況

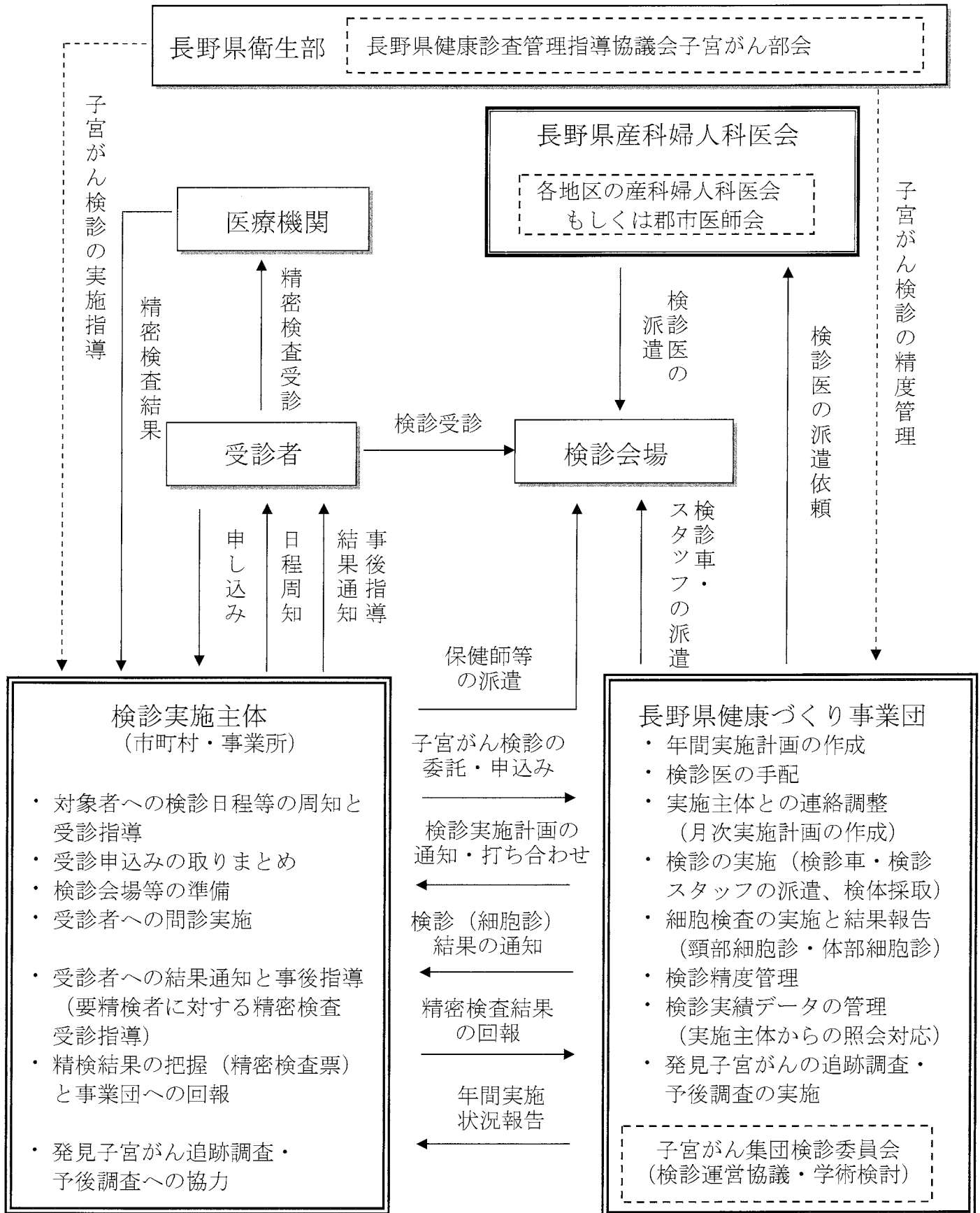
(表1) 長野県子宮がん検診推移 (昭和45年度～平成11年度)

区分	検診人員 (人)	要精検者数		精検受診者数		子宮頸がん数		陽性反応 的中度 (%)	長野県内 子宮がん 死亡者数 (人)
		(人)	要精検 率 (%)	(人)	受診率 (%)	発見率 (%)			
S45	8,887	306	3.4	285	93.1	30	0.34	10.53	126
S46	15,519	350	2.3	329	94.0	53	0.34	16.11	117
S47	16,583	228	1.4	204	89.5	35	0.21	17.16	95
S48	21,806	444	2.0	432	97.3	62	0.28	14.35	99
S49	31,595	614	1.9	586	95.4	80	0.25	13.65	118
S50	35,556	788	2.2	771	97.8	95	0.27	12.32	105
S51	36,619	631	1.7	618	97.9	89	0.24	14.40	90
S52	40,011	695	1.7	682	98.1	72	0.18	10.56	107
S53	40,706	832	2.0	815	98.0	59	0.14	7.24	98
S54	43,089	926	2.1	893	96.4	51	0.12	5.71	118
S55	45,038	853	1.9	825	96.7	45	0.10	5.45	116
S56	45,193	855	1.9	805	94.2	44	0.10	5.47	104
S57	43,374	640	1.5	619	96.7	28	0.06	4.52	85
S58	44,228	647	1.5	620	95.8	27	0.06	4.35	92
S59	46,045	637	1.4	611	95.9	42	0.09	6.87	87
S60	41,624	400	1.0	368	92.0	14	0.03	3.80	75
S61	43,058	408	0.9	391	95.8	20	0.05	5.12	67
S62	42,400	362	0.9	343	94.8	25	0.06	7.29	94
S63	39,745	422	1.1	392	92.9	20	0.05	5.10	89
H1	39,648	335	0.8	308	91.9	32	0.08	10.39	77
H2	39,197	350	0.9	317	90.6	16	0.04	5.05	72
H3	39,007	340	0.9	317	93.2	15	0.04	4.73	85
H4	36,337	412	1.1	379	92.0	19	0.05	5.01	91
H5	36,958	480	1.3	435	90.6	21	0.06	4.83	72
H6	35,929	249	0.7	216	86.7	16	0.04	7.41	88
H7	32,286	261	0.8	245	93.9	13	0.04	5.31	82
H8	30,552	165	0.5	159	96.4	13	0.04	8.18	88
H9	27,839	63	0.2	59	93.7	17	0.06	28.81	83
H10	26,507	67	0.3	61	91.0	15	0.06	24.59	70
H11	26,734	75	0.3	75	100.0	17	0.06	22.67	81
累計	1,052,070	13,835	1.3	13,160	95.1	1,085	0.10	8.24	2,771

(平成11年度は健康づくり事業団による子宮がん集団検診)



II 子宮がん集団検診実施体制の概要



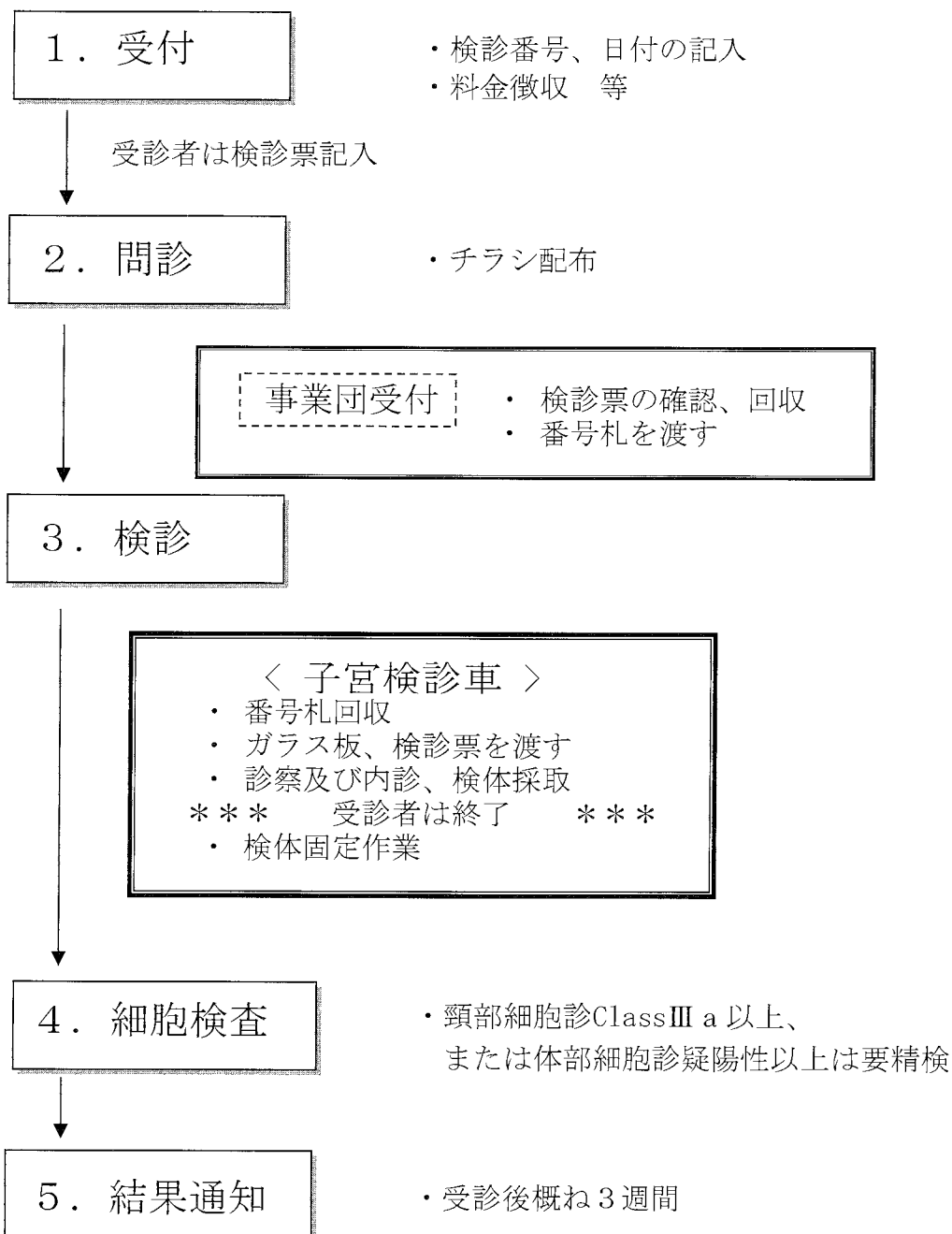
Ⅲ 子宮がん集団検診実施状況

A. 検診体制

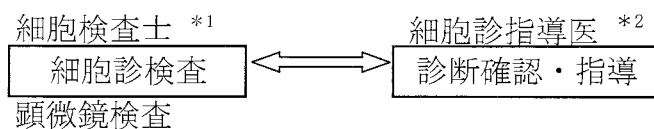
(表2) 検診体制 (平成15年度まで)

検診形式	
対象年齢	30歳以上
検診内容	問診、診察及び内診、検体採取
受診間隔	毎年

B. 子宮がん集団検診の流れ



C. 細胞検査（細胞診）



ウイルス感染、特定疾患、腫瘍性病変が疑われる場合、指導医の診断確認及び指導を必要とする

*1 日本臨床細胞学会認定細胞検査士

*2 日本臨床細胞学会認定細胞診指導医

（表3）細胞判定基準及び事後指導基準（頸部）

細胞診所見	判定基準	主な推定病変及び細胞所見	事後指導基準
Class I	異型細胞を認めない	正常上皮（閉経後萎縮を含む）	1年1回の定期検診
Class II	異型細胞を認めるが、悪性像はない	良性異型上皮（核肥大、閉経後を含む炎症、過角化、錯角化、修復細胞、化生細胞、極度に萎縮した細胞） 感染症（トリコモナス、真菌、ヘルペス、その他）	1年1回の定期検診（但し、細胞像により6ヶ月後再細胞診。また、感染症については、治療後再細胞診が望ましい）
Class III	III a 異型性の高度なもの、または悪性を疑わせる細胞が認められる	良性異型上皮（異形成疑い）、軽度異形成、中等度異形成、異形腺細胞	直ちに（1ヶ月以内）精密検査（組織診） （なお、組織診の場合には、コルポスコープによる狙い切除が望ましい）
	III b	異形腺細胞、高度異形成、上皮内癌、微小浸潤癌	
Class IV	悪性が極めて濃厚な異型細胞	上皮内癌、微小浸潤癌	
Class V	悪性と診断可能な異型細胞	微小浸潤癌、浸潤癌	

（表4）細胞判定基準及び事後指導基準（体部）

細胞診所見	判定基準	主な推定病変及び細胞所見	事後指導基準
陰性	異型細胞を認めない 異型細胞を認めるが、悪性像はない	正常内膜、良性異型細胞（核肥大、修復細胞等）	不正性器出血のチェック等、日常生活上の注意を促すと共に、引き続き翌年の検査受診を勧奨する
疑陽性	悪性を疑う細胞を認めるが、悪性と確診出来ない	良性異型細胞、子宮内膜増殖症、子宮体癌	直ちに（1ヶ月以内）精密検査（組織診）
陽性	悪性が極めて濃厚な異型細胞、悪性と診断可能な異型細胞	子宮内膜増殖症、子宮体癌	
判定不能	内膜細胞が確認できない	標本判定不能	直ちに再細胞診

日本産科婦人科学会 日本産婦人科医会

D. 年度別にみた子宮がん集団検診結果（平成12～15年度）

（表5）年度別検診子宮細胞診結果（平成12～15年度）

年度	受診者合計 (人) 体部		頸部細胞診結果								体部細胞診結果						
			Class						判定不能	要精検者 (Ⅲa・Ⅲb・Ⅳ・Ⅴ)		陰性	疑陽性	陽性	判定不能	要精検者 (疑陽性・陽性)	
			I	II	Ⅲa	Ⅲb	Ⅳ	V		(人)	(%)					(人)	(%)
H12	26,285	68	14,419	11,786	55	10	10	5	0	80	0.3	67	1	0	0	1	1.5
H13	28,494	71	17,548	10,836	88	11	6	5	0	110	0.4	70	1	0	0	1	1.4
H14	28,219	43	16,747	11,364	86	14	4	4	0	108	0.4	42	1	0	0	1	2.3
H15	28,740	36	19,089	9,535	87	16	8	5	0	116	0.4	32	1	1	2	2	5.6

（表6）年度別子宮細胞診要精検者精密検査結果（平成12～15年度）

年度	精密検査受診者		精密検査受診率		発見がん合計 (%)	頸部細胞診精密検査結果							体部細胞診精密検査結果			
	(人)	体部	(%)	体部		がん内訳				異型上皮	その他の異常	異常なし	内膜がん	その他の異常	異常なし	
						上皮内がん	扁平上皮がん	腺がん	その他のがん							
H12	80	1	100	100	19	0.07	13	2	2	*2	38	18	5	0	1	0
H13	96	1	87	100	10	0.04	5	2	3	0	36	48	2	0	0	1
H14	96	1	89	100	12	0.04	10	2	0	0	19	50	15	0	1	0
H15	94	2	81	100	8	0.03	5	2	1	0	38	37	11	0	2	0

*子宮頸部細胞診要精検者の精密検査にて発見された子宮体がん2例含む

（表7）年度別検診臨床診断結果（平成12～15年度）

年度	要治療者臨床所見（重複者あり）						合計			
	びらん	ポリープ	子宮筋腫	膣炎 (老人性・トリコモナス・カンジダを含む)	付属器腫瘍	その他の部位の疾患	異常なし	要治療	要経過観察	治療不要
H12	176	324	76	401	32	65	16,632	1,004	1,821	21,710
H13	181	397	91	461	18	72	16,039	1,141	2,250	22,009
H14	200	422	101	364	23	68	19,729	1,100	2,622	24,456
H15	148	335	94	380	32	113	21,061	1,043	2,170	25,527

(表8) 年度別検診臨床診断要治療者治療結果 (平成12～15年度)

年度	治療対象実数	治療受診者		子宮がん	子宮頸部びらん	頸管ポリープ	子宮筋腫	膣炎 (老人性・トリコモナス・カンジダを含む)	その他の異常	異常なし
		(人)	治療率 (%)							
H12	994	682	68.6	0	114	204	51	208	73	32
H13	1,133	718	63.4	0	93	207	48	276	60	34
H14	1,097	684	62.4	0	74	280	62	171	63	34
H15	1,035	691	66.8	1	66	214	50	221	91	48

治療対象実数 = 臨床診断要治療者 - 細胞診要精検者

治療率 = (治療受診者 / 治療対象実数) × 100 (%)

E. 年度別にみた発見子宮がん(平成12～15年度)

(表9) 年度別にみた発見子宮がん (平成12～15年度)

年度	受診者総数 (人)	発見子宮がん数	発見子宮がん 発見率 (%)
平成12年度	26,285	* 19	0.07
平成13年度	28,494	10	0.04
平成14年度	28,219	12	0.04
平成15年度	28,740	※* 9	0.03
計	111,738	50	0.04

*平成12年度は2例、平成15年度は1例の子宮体がんを含む。

※平成15年度は臨床診断要治療者から発見された子宮体がん1例を含む。

F. 年度別にみた子宮がん集団検診細胞診実施状況(平成12～15年度)

(表10) 年度別にみた子宮頸部細胞診実施状況 (平成12～15年度)

年度	受診者総数 (人)	要精検者 数 (人)	要精検率 (%)	精検 受診者 数 (人)	精検 受診率 (%)	発見子宮 がん数	発見子宮 がん 発見率 (%)	陽性 的中度 (%)
平成12年度	26,285	80	0.3	80	100.0	19	0.07	23.8
平成13年度	28,494	110	0.4	96	87.3	10	0.04	10.4
平成14年度	28,219	108	0.4	96	88.9	12	0.04	12.5
平成15年度	28,740	116	0.4	94	81.0	8	0.03	8.5
計	111,738	414	0.4	366	89.3	49	0.04	13.4

要精検率 = (要精検者数 / 検診受診者数) × 100 (%) 精検受診率 = (精検受診者数 / 要精検者数) × 100 (%)

がん発見率 = (発見がん数 / 検診受診者数) × 100 (%) 陽性的中度 = (発見がん数 / 要精検者数) × 100 (%)

G. 年代別にみた子宮がん集団検診細胞診実施状況

(表 1 1) 平成 1 2 年度

年齢構成	受診者数		要精検者数		要精検率 (%)	精検受診者数		精検 受診率 (%) (頸部のみ)	発見子宮 がん数	発見子宮 がん 発見率 (%)	陽性 的中度 (%)
	(人)	体部 (人)	(人)	体部 (人)		(人)	体部 (人)				
30歳未満	23	0	1	0	4.3	1	0	100.0	0	0.00	0.0
30～34歳	1,041	0	4	0	0.4	4	0	100.0	0	0.00	0.0
35～39歳	1,868	6	14	0	0.7	14	0	100.0	6	0.32	42.9
40～44歳	2,271	4	12	0	0.5	12	0	100.0	4	0.18	33.3
45～49歳	2,378	4	14	0	0.6	14	0	100.0	3	0.13	21.4
50～54歳	3,433	27	8	0	0.2	8	0	100.0	* 2	0.06	25.0
55～59歳	3,576	11	6	1	0.2	6	1	100.0	* 1	0.03	16.7
60～64歳	3,990	7	7	0	0.2	7	0	100.0	2	0.05	28.6
65～69歳	4,140	4	7	0	0.2	7	0	100.0	1	0.02	14.3
70～74歳	2,667	5	7	0	0.3	7	0	100.0	0	0.00	0.0
75～79歳	792	0	0	0	0.0	0	0	0.0	0	0.00	0.0
80歳以上	106	0	0	0	0.0	0	0	0.0	0	0.00	0.0
計	26,285	68	80	1	0.3	80	1	100.0	19	0.07	23.8

*平成 1 2 年度は子宮頸部細胞診の要精検者から発見された子宮体がんを 2 例含む

(表 1 2) 平成 1 3 年度

年齢構成	受診者数		要精検者数		要精検率 (%)	精検受診者数		精検 受診率 (%) (頸部のみ)	発見子宮 がん数	発見子宮 がん 発見率 (%)	陽性 的中度 (%)
	(人)	体部 (人)	(人)	体部 (人)		(人)	体部 (人)				
30歳未満	51	0	1	0	2.0	1	0	100.0	0	0.00	0.0
30～34歳	1,449	1	11	0	0.8	10	0	90.9	2	0.14	18.2
35～39歳	2,255	4	10	0	0.4	10	0	100.0	1	0.04	10.0
40～44歳	2,536	9	17	0	0.7	14	0	82.4	2	0.08	11.8
45～49歳	2,531	11	19	0	0.8	16	0	84.2	1	0.04	5.3
50～54歳	3,587	25	20	1	0.6	19	1	95.0	3	0.08	15.0
55～59歳	3,532	11	8	0	0.2	6	0	75.0	0	0.00	0.0
60～64歳	4,174	6	6	0	0.1	5	0	83.3	0	0.00	0.0
65～69歳	4,293	3	10	0	0.2	9	0	90.0	0	0.00	0.0
70～74歳	2,966	0	7	0	0.2	5	0	71.4	1	0.03	14.3
75～79歳	966	1	0	0	0.0	0	0	0.0	0	0.00	0.0
80歳以上	154	0	1	0	0.6	1	0	100.0	0	0.00	0.0
計	28,494	71	110	1	0.4	96	1	87.3	10	0.04	9.1

(表13) 平成14年度

年齢構成	受診者数		要精検者数		要精検率 (%)	精検受診者数		精検 受診率 (%) (頸部のみ)	発見子宮 がん数	発見子宮 がん 発見率 (%)	陽性的 中度 (%)
	(人)	体部 (人)	(人)	体部 (人)		(人)	体部 (人)				
30歳未満	66	0	0	0	0.0	0	0	0.0	0	0.00	0.0
30～34歳	1,455	1	7	0	0.5	6	0	85.7	0	0.00	0.0
35～39歳	2,246	5	14	0	0.6	11	0	78.6	1	0.04	7.1
40～44歳	2,583	5	13	0	0.5	12	0	92.3	2	0.08	15.4
45～49歳	2,373	8	16	0	0.7	12	0	75.0	4	0.17	25.0
50～54歳	3,372	14	17	0	0.5	17	0	100.0	2	0.06	11.8
55～59歳	3,573	7	7	1	0.2	6	1	85.7	0	0.00	0.0
60～64歳	4,188	2	11	0	0.3	10	0	90.9	1	0.02	9.1
65～69歳	4,122	1	10	0	0.2	10	0	100.0	2	0.05	20.0
70～74歳	3,034	0	8	0	0.3	7	0	87.5	0	0.00	0.0
75～79歳	1,049	0	4	0	0.4	4	0	100.0	0	0.00	0.0
80歳以上	158	0	1	0	0.6	1	0	100.0	0	0.00	0.0
計	28,219	43	108	1	0.4	96	1	88.9	12	0.04	11.1

(表14) 平成15年度

年齢構成	受診者数		要精検者数		要精検率 (%)	精検受診者数		精検 受診率 (%) (頸部のみ)	発見子宮 がん数	発見子宮 がん 発見率 (%)	陽性的 中度 (%)
	(人)	体部 (人)	(人)	体部 (人)		(人)	体部 (人)				
30歳未満	102	0	2	0	2.0	1	0	50.0	0	0.00	0.0
30～34歳	1,502	0	13	0	0.9	11	0	84.6	0	0.00	0.0
35～39歳	2,366	2	10	0	0.4	9	0	90.0	2	0.08	20.0
40～44歳	2,572	2	24	0	0.9	19	0	79.2	3	0.12	12.5
45～49歳	2,441	2	12	0	0.5	9	0	75.0	1	0.04	8.3
50～54歳	3,188	13	9	0	0.3	6	0	66.7	0	0.00	0.0
55～59歳	3,740	10	8	1	0.2	6	1	75.0	0	0.00	0.0
60～64歳	4,285	4	14	0	0.3	13	0	92.9	0	0.00	0.0
65～69歳	4,007	3	9	1	0.2	9	1	100.0	1	0.02	11.1
70～74歳	3,112	0	13	0	0.4	9	0	69.2	1	0.03	7.7
75～79歳	1,212	0	0	0	0.0	0	0	0.0	0	0.00	0.0
80歳以上	213	0	2	0	0.9	2	0	100.0	0	0.00	0.0
計	28,740	36	116	2	0.4	94	2	81.0	8	0.03	6.9

追跡調査協力医療機関（五十音順・敬称略）

相澤病院
飯田市立病院
伊那中央病院
組合立諏訪中央病院
慶應義塾大学病院
小海赤十字病院
佐久市立国保浅間総合病院
J A長野厚生連 安曇総合病院
J A長野厚生連 小諸厚生総合病院
J A長野厚生連 佐久総合病院
J A長野厚生連 篠ノ井総合病院
J A長野厚生連 北信総合病院
昭和伊南総合病院
信州大学医学部附属病院
諏訪赤十字病院
独立行政法人国立病院機構 長野病院
独立行政法人国立病院機構 松本病院
安曇野赤十字病院
長野市民病院
長野赤十字病院
波田総合病院
平出クリニック産科婦人科
保倉産科婦人科医院
丸子中央総合病院

ご協力ありがとうございました。

*平成18年度現在の医療機関名を掲載させていただきました。

IV 子宮がん集団検診発見子宮がん 追跡調査一覧表 (平成12～15年度)

※臨床進行期分類、組織診断等は子宮頸癌取扱い規約(1997年、金原出版)、子宮体癌取扱い規約(1996年、金原出版)をご参照ください。

(表15-1) 発見子宮頸がん追跡調査一覧表

年度	症例 I D	発見時年齢	細胞診	受診歴	精密検査			組織学的診断	治療有無	治療法	術式	リンパ節郭清	併用治療		臨床進行期	最終組織診断
					コルポ診	生検	円錐切除						放射線治療	化学療法		
12-	1	36	IV	初	○	○		上皮内癌	有り	手術	(円錐切除)			0	扁平上皮癌	上皮内癌
12-	2	47	IV	11	○	○		上皮内癌	有り	手術	(単純全摘)			Ia1	扁平上皮癌	微小浸潤癌
12-	3	42	IV	初	○	○		上皮内癌	有り	手術	(単純全摘)			Ia1	扁平上皮癌	微小浸潤癌
12-	4	35	IIIa	11	○	○		上皮内癌	有り	手術	(単純全摘)			0	扁平上皮癌	上皮内癌
12-	5	37	IV	初	○	○		異形成(高度)	有り	手術	(単純全摘)			0	扁平上皮癌	上皮内癌
12-	6	37	IV	初	○	○		上皮内癌	有り	手術	(単純全摘)			0	扁平上皮癌	上皮内癌
12-	7	44	IIIb	10	○	○		異形成(高度)	有り	手術	(単純全摘)			0	扁平上皮癌	上皮内癌
12-	8	39	IIIb	6	○	○		上皮内癌	有り	手術	(単純全摘)			0	扁平上皮癌	上皮内癌
12-	9	50	IV	初	○	○	○	上皮内癌	有り	手術	(単純全摘)			0	扁平上皮癌	上皮内癌
12-	10	62	V	初	○	○	○	微小浸潤癌	有り	手術	(準広汎)			Ia1	扁平上皮癌	上皮内癌
12-	11	63	V	11	○	○		浸潤癌(腺癌)	有り	手術	(広汎全摘)	○		Ib1	扁平上皮癌	微小浸潤癌
12-	12	68	IIIb	11	○	○		上皮内癌	有り	手術	(単純全摘)			0	扁平上皮癌	上皮内癌
12-	13	49	III	初	○	○		浸潤癌(腺癌)	有り	手術	(準広汎)	○		Ib	腺癌	
12-	14	48	V	初	○	○		浸潤癌(扁平上皮癌)	有り	手術	(広汎全摘)	○		Ib1	扁平上皮癌	浸潤癌
12-	15	40	IV	初	○	○		上皮内癌	有り	手術	(単純全摘)			0	扁平上皮癌	上皮内癌
12-	16	37	IV	11				上皮内癌	有り	手術	(単純全摘)			0	扁平上皮癌	上皮内癌
12-	17	42	IIIa	11	○	○		異形成(高度)	有り	手術	(円錐切除)			0	扁平上皮癌	上皮内癌
13-	1	70	IIIa	初	○	○		上皮内癌	有り	手術	(単純全摘)			0	扁平上皮癌	上皮内癌
13-	2	50	III	12				腺癌	有り	手術	(広汎全摘)	○		Ib1	腺癌	上皮内癌
13-	3	44	IIIb	12	○	○		上皮内癌	有り	手術	(単純全摘)			0	扁平上皮癌	上皮内癌
13-	4	43	V	7	○	○		浸潤癌(腺癌)	有り	手術	(広汎全摘)	○		Ib1	腺癌	上皮内癌
13-	5	52	IV	初	○	○		上皮内癌	有り	手術	(単純全摘)			Ia1	扁平上皮癌	
13-	6	30	IV	初	○	○		浸潤癌(扁平上皮癌)	有り	手術	(円錐切除)			Ia	扁平上皮癌	微小浸潤癌
13-	7	36	IV	初	○	○		浸潤癌(腺癌)	有り	手術	(広汎全摘)			Ib	腺癌	微小浸潤癌
13-	8	33	IIIb	初	○	○	○	微小浸潤癌	有り	手術	(単純全摘)			Ia1	扁平上皮癌	微小浸潤癌
13-	9	54	IV	初	○	○		上皮内癌	有り	手術	(単純全摘)			Ia1	扁平上皮癌	微小浸潤癌
13-	10	47	IV	12	○	○		上皮内癌	有り	手術	(単純全摘)			0	扁平上皮癌	上皮内癌

(表15-2) 発見子宮頸がん追跡調査一覧表

年度	症例 I D	発見時年齢	細胞診	受診歴	精密検査			組織学的診断	治療有無	治療法	術式	リンパ節郭清	併用治療		臨床進行期	最終組織診断
					子宮鏡	生検	円錐切除						放射線治療	化学療法		
14-	1	50	Ⅲa	初	○	○	○	上皮内癌	有り	手術 (円錐切除)				0	扁平上皮癌	
14-	2	46	Ⅲa	初	○	○	○	上皮内癌	有り	手術 (単純全摘)				0	扁平上皮癌	
14-	3	49	Ⅲb	初				上皮内癌	有り	手術 (単純全摘)				0	扁平上皮癌	
14-	4	64	V	初	○	○	○	異形成 (中～高度)	有り	手術 (円錐切除)				0	扁平上皮癌	
14-	5	36	V	初	○	○	○	微小浸潤癌・浸潤癌	有り	手術 (準広汎)		○		Ib1	扁平上皮癌 浸潤癌	
14-	6	47	Ⅲb	初	○			上皮内癌	有り	手術 (単純全摘)				0	扁平上皮癌	
14-	7	47	Ⅲb	初	○	○	○	上皮内癌	有り	手術 (単純全摘)				Ia1	扁平上皮癌 微小浸潤癌	
14-	8	40	IV	13	○	○	○	上皮内癌	有り	手術 (円錐切除)				0	扁平上皮癌	
14-	9	54	Ⅲ	9	○	○	○	上皮内癌	有り	手術 (準広汎)				Ia1	扁平上皮癌 微小浸潤癌	
14-	10	65	Ⅲa	12	○	○	○	異形成 (高度)	有り	手術 (単純全摘)				0	扁平上皮癌	
15-	1	38	IV	初	○	○	○	微小浸潤癌	有り	手術 (単純全摘)				Ia1	扁平上皮癌 微小浸潤癌	
15-	2	35	Ⅲb	13	○	○	○	浸潤癌 (扁平上皮癌)	有り	手術 (広汎全摘)		○		Ib1	扁平上皮癌 微小浸潤癌	
15-	3	71	IV	14	○	○	○	上皮内癌	不明	検査後来院せず				不明	扁平上皮癌 浸潤癌	
15-	4	69	V	初	○	○	○	浸潤癌 (腺癌)	有り	手術 (広汎全摘)		○		Ib2	腺癌	
15-	5	48	Ⅲb	初	○	○	○	上皮内癌	有り	手術 (円錐切除)				0	扁平上皮癌	
15-	6	41	V	初	○	○	○	浸潤癌 (扁平上皮癌)	有り	手術 (準広汎)		○		Ib1	扁平上皮癌 浸潤癌	
15-	7	42	Ⅲb	初	○	○	○	上皮内癌	有り	手術 (単純全摘)				0	扁平上皮癌	
15-	8	44	Ⅲb	12	○	○	○	上皮内癌	有り	手術 (円錐切除)				0	扁平上皮癌	

(表16) 発見子宮体がん追跡調査一覧表

年度	症例 I D	発見時年齢	細胞診	受診歴	精密検査			組織学的診断	治療有無	治療法	術式	リンパ節郭清	併用治療		臨床進行期	最終組織診断
					子宮鏡	生検	超音波						放射線治療	化学療法		
12-	18	52	※Ⅲb	初		○	○	腺癌	有り	手術 (単純全摘)					IIb	腺癌
12-	19	56	※V	11		○		腺癌	有り	手術 (準広汎)		○			IIIa	腺癌
15-	9	69	※*Ⅱ	初		○	○	上皮内癌	有り	手術 (準広汎)		○			IIIc	腺癌

※子宮頸部細胞診要精検者から発見された子宮体がんのため、検診においての子宮頸部細胞診の結果を表示。
*臨床診断要治療者から発見されたがん。

V 確定子宮がんの分析(平成12～15年度)

A. 調査成績

1. 確定子宮がんの年度別分布

平成12～15年度に行われた子宮がん集団検診において12年度が19例、13年度が10例、14年度が12例、15年度が9例の子宮がんが発見された。この発見子宮がんを対象に精密医療機関、手術医療機関の協力を得て追跡調査を行った。

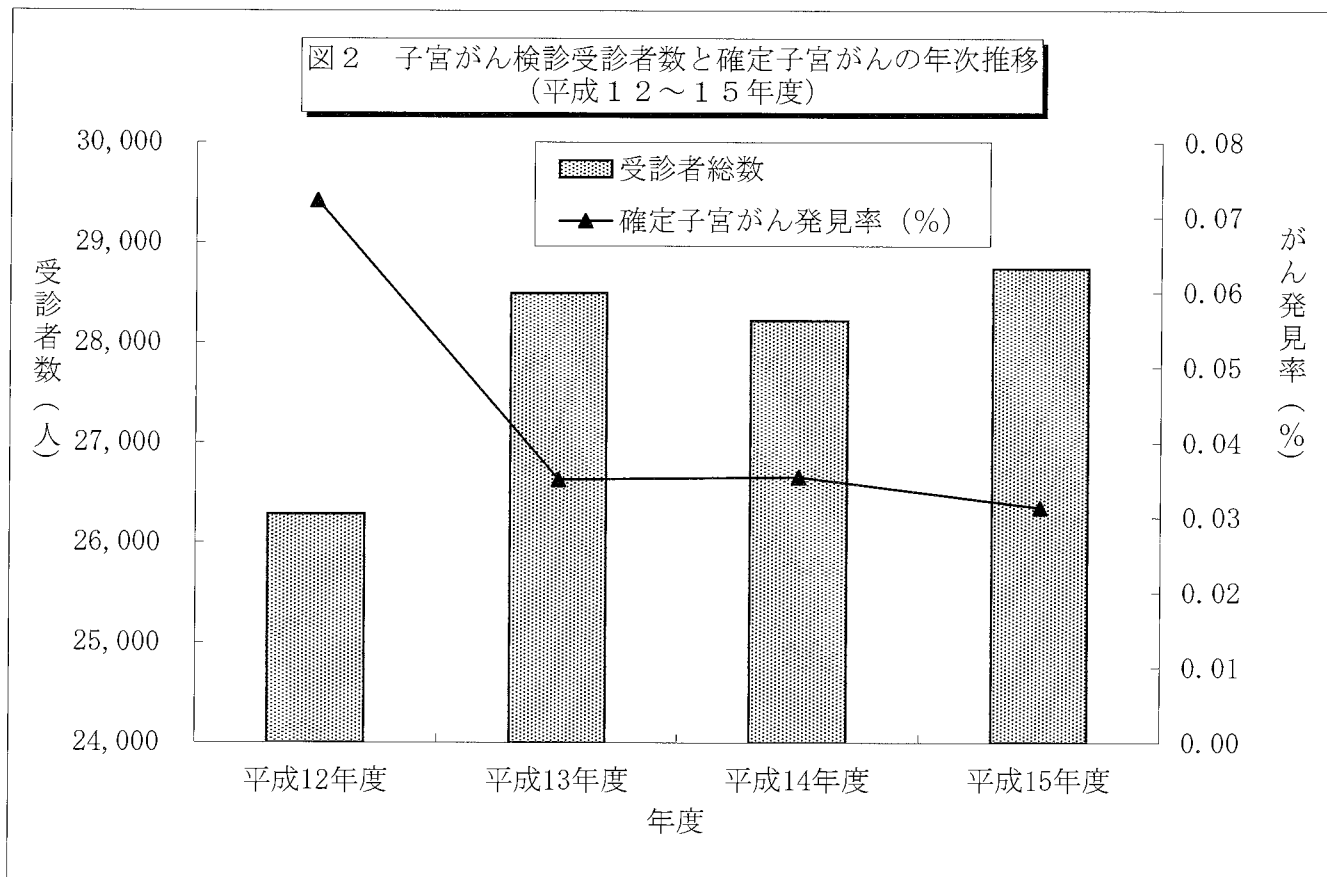
平成12～15年度子宮がん集団検診受診者の実施状況と確定子宮がんの集計を、表17、図2に示した。精密検査を受け子宮がんと診断された確定子宮がんの数は、12年度が19例(子宮体がん2例含む)、13年度が10例、14年度が10例、15年度が9例(子宮体がん1例含む)であった。

(表17) 検診実施状況報告(平成12～15年度)

区分	受診者 総数 (人)	細胞診 要精検者数 (人) (体部含む)	要精検率 (%)	精検 受診者数 (人)	精検 受診率 (%)	確定 子宮がん 数	確定 子宮がん 発見率 (%)
平成12年度	26,285	81	0.31	81	100.0	* 19	0.07
平成13年度	28,494	111	0.39	97	87.4	10	0.04
平成14年度	28,219	109	0.39	97	89.0	10	0.04
平成15年度	28,740	118	0.41	96	81.4	*※ 9	0.03
計	111,738	419	0.37	371	89.4	48	0.04

*子宮体がんを平成12年度は2例、平成15年度は1例含む。

※臨床診断要治療者から発見された子宮体がんを1例含む。



2. 確定子宮がんの年代別分布（平成12～15年度）

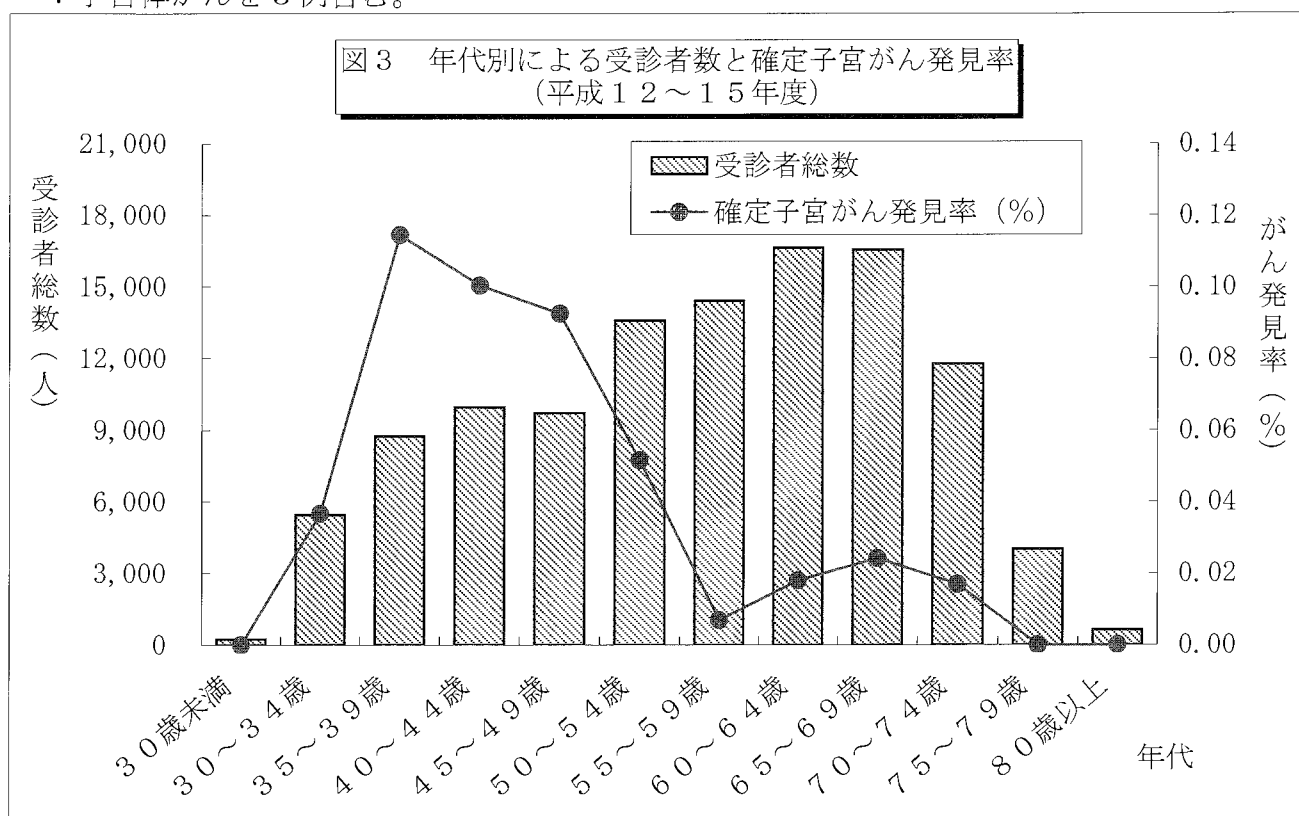
平成12～15年度における子宮がん検診受診者と確定子宮がん数の年代別集計を表18、図3に示した。

発見時年齢30～71歳の受診者から発見されており、年代別にみると35～39歳と40～44歳が各10例（構成比20.8%）、がん発見率0.11%と最も多く、次いで45～49歳が9例（構成比18.8%）、がん発見率0.09%、50～54歳が7例（構成比14.6%）、がん発見率0.05%であった。確定子宮がん症例の平均年齢は47.9歳で、子宮頸がんのみでは平均年齢47.1歳、子宮体がんでは平均年齢59.0歳だった。

（表18）年代別による子宮がん検診受診者数と確定子宮がん発見率（平成12～15年度）

区分	受診者総数（人）	確定子宮がん		
		症例数	がん発見率（%）	構成比（%）
30歳未満	242	0	0.00	0.0
30～34歳	5,447	2	0.04	4.2
35～39歳	8,735	10	0.11	20.8
40～44歳	9,962	10	0.10	20.8
45～49歳	9,723	9	0.09	18.8
50～54歳	13,580	* 7	0.05	14.6
55～59歳	14,421	* 1	0.01	2.1
60～64歳	16,637	3	0.02	6.3
65～69歳	16,562	* 4	0.02	8.3
70～74歳	11,779	2	0.02	4.2
75～79歳	4,019	0	0.00	0.0
80歳以上	631	0	0.00	0.0
計	111,738	48	0.04	100.0

*子宮体がんを3例含む。



B. 疫学的分析（問診データ集計）

1. 血縁のがんの有無

血縁は三親等（父母、祖父母、子、孫、兄弟姉妹、甥姪、叔父叔母）以内とし、がん（婦人科以外を含む）の罹患は、「血縁者のがんが有る」が19例(39.6%)であった。

（表19）血縁の癌素因の有無（平成12～15年度）

癌素因	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	症例数	構成比 (%)
有	* 10	4	3	2	* 19	39.6
無	9	6	7	* 7	* 29	60.4
計	* 19	10	10	* 9	48	100.0

*平成12年度は2例、平成15年度は1例の子宮体がんを含む。

2. 既往歴（婦人科疾患）

婦人科疾患の既往があった症例は7例(14.6%)であった。婦人科疾患のうちでは膣炎が3例(6.3%)と最も多く、次いで子宮筋腫とその他が各2例(4.2%)、頸管ポリープが1例(2.1%)であった。

（表20）既往歴（婦人科疾患）（平成12～15年度）

疾患名	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	症例数	構成比 (%)
有	4	0	3	0	7	14.6
子宮筋腫	* 2	0	0	0	* 2	4.2
膣炎	◎ 2	0	1	0	◎ 3	6.3
頸管ポリープ	0	0	1	0	1	2.1
その他	◎ 1	0	1	0	◎ 2	4.2
無	* 15	10	7	* 9	* 41	85.4
計	* 19	10	10	* 9	48	100.0

*平成12年度は2例、平成15年度は1例の子宮体がんを含む。

◎既往疾患重複症例

3. 自覚症状の有無

25例(52.1%)が無症状であった。また、自覚症状があった症例は23例(47.9%)であった。そのうち帯下が18例(37.5%)と最も多く、次いで不正出血が9例(18.8%)であった。

（表21）自覚症状の有無（平成12～15年度）

自覚症状	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	症例数	構成比 (%)
有	7	3	7	6	23	47.9
不正出血	◎ 2	1	◎ 4	◎ 2	◎ 9	18.8
帯下	◎ 6	1	◎ 5	◎ * 6	◎ * 18	37.5
かゆみ	0	1	0	0	1	2.1
無	* 12	7	3	3	* 25	52.1
計	* 19	10	10	* 9	48	100.0

*平成12年度は2例、平成15年度は1例の子宮体がんを含む。

◎自覚症状重複症例

4. 受診歴

※発見年より過去5年以上受診歴がない場合は初回受診とした。

過去の子宮がん検診の受診歴は、初回受診が31例(64.6%)で最も多く、繰り返し受診（過去5年以内に一度でも受診歴がある）が17例(35.4%)であった。

（表22）受診歴の有無（平成12～15年度）

受診歴	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	症例数	構成比 (%)
初回受診	* 11	7	7	* 6	* 31	64.6
繰り返し受診	* 8	3	3	3	* 17	35.4
計	* 19	10	10	* 9	48	100.0

*平成12年度は2例、平成15年度は1例の子宮体がんを含む。

5. 初潮年齢

初潮年齢は13歳未満が19例(39.6%)と最も多く、次いで13歳と14歳が各7例(14.6%)であった。

(表23) 初潮年齢 (平成12～15年度)

初潮年齢	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	症例数	構成比 (%)
13歳未満	6	5	4	4	19	39.6
13歳	* 4	1	1	1	* 7	14.6
14歳	3	1	2	1	7	14.6
15歳	1	0	3	0	4	8.3
16歳	* 1	0	0	* 2	* 3	6.3
17歳	0	1	0	1	2	4.2
不明	4	2	0	0	6	12.5
計	* 19	10	10	* 9	48	100.0

*平成12年度は2例、平成15年度は1例の子宮体がんを含む。

6. 初婚年齢

初婚年齢は20～24歳と25～29歳が各17例(35.4%)、次いで30歳以上が6例(12.5%)であった。20歳代は合計34例(70.8%)であった。

(表24) 初婚年齢 (平成12～15年度)

初婚年齢	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	症例数	構成比 (%)
未婚	2	0	1	1	4	8.3
20歳未満	0	0	1	1	2	4.2
20～24歳	* 7	3	4	* 3	* 17	35.4
25～29歳	6	5	3	3	17	35.4
30歳以上	4	1	1	0	6	12.5
不明	0	1	0	1	2	4.2
計	* 19	10	10	* 9	48	100.0

*平成12年度は2例、平成15年度は1例の子宮体がんを含む。

7. 初産時年齢

初産時年齢は25～29歳が18例(37.5%)で最も多く、次いで出産経験無しが11例(22.9%)であった。

(表25) 初産時年齢 (平成12～15年度)

初産時年齢	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	症例数	構成比 (%)
出産経験無し	4	3	3	1	11	22.9
20～24歳	* 3	1	2	* 3	* 9	18.8
25～29歳	* 6	5	4	3	* 18	37.5
30歳以上	6	0	1	1	8	16.7
不明	0	1	0	1	2	4.2
計	* 19	10	10	* 9	48	100.0

*平成12年度は2例、平成15年度は1例の子宮体がんを含む。

8. 妊娠回数

妊娠回数は3～5回が21例(43.8%)で最も多く、次いで1～2回が16例(33.3%)、妊娠経験無しが11例(22.9%)であった。

(表26) 妊娠回数 (平成12～15年度)

妊娠回数	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	症例数	構成比 (%)
妊娠経験無し	3	4	3	1	11	22.9
1～2回	* 7	2	3	4	* 16	33.3
3～5回	* 9	4	4	* 4	* 21	43.8
計	* 19	10	10	* 9	48	100.0

*平成12年度は2例、平成15年度は1例の子宮体がんを含む。

9. 分娩回数

分娩回数は2回が16例(33.3%)と最も多く、次いで分娩経験無しが13例(27.1%)、3回が9例(18.8%)、1回が8例(16.7%)であった。

(表27) 分娩回数 (平成12～15年度)

分娩回数	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	症例数	構成比 (%)
分娩経験無し	4	4	3	2	13	27.1
1回	3	1	3	1	8	16.7
2回	* 9	2	1	4	* 16	33.3
3回	3	3	1	* 2	* 9	18.8
4回	0	0	2	0	2	4.2
計	* 19	10	10	* 9	48	100.0

*平成12年度は2例、平成15年度は1例の子宮体がんを含む。

10. 自然流産の有無

自然流産は経験が無いが34例(70.8%)と多かった。

(表28) 自然流産の有無 (平成12～15年度)

自然流産	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	症例数	構成比 (%)
有	* 9	3	0	2	* 14	29.2
無	* 10	7	10	* 7	* 34	70.8
計	* 19	10	10	* 9	48	100.0

*平成12年度は2例、平成15年度は1例の子宮体がんを含む。

11. 人工流産の有無

人工流産は経験が無いが42例(87.5%)と多かった。

(表29) 人工流産の有無 (平成12～15年度)

人工流産	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	症例数	構成比 (%)
有	* 4	0	1	1	* 6	12.5
無	* 15	10	9	* 8	* 42	87.5
計	* 19	10	10	* 9	48	100.0

*平成12年度は2例、平成15年度は1例の子宮体がんを含む。

12. 閉経年齢

閉経年齢は閉経前が34例(70.8%)と多かった。

(表30) 閉経年齢 (平成12～15年度)

閉経年齢	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	症例数	構成比 (%)
閉経前	13	9	7	5	34	70.8
46歳未満	1	0	0	* 2	* 3	6.3
46～48歳	1	0	0	0	1	2.1
49～50歳	* 2	0	2	2	* 6	12.5
51～53歳	* 2	1	1	0	* 4	8.3
計	* 19	10	10	* 9	48	100.0

*平成12年度は2例、平成15年度は1例の子宮体がんを含む。

C. 臨床的および病理組織学的分析

1. 細胞診判定

平成12～15年度の確定子宮がんの細胞診判定の集計を表31、32、図4に示した。

子宮頸がんではClassⅣが最も多く16例(35.6%)、次いでClassⅢbが12例(26.7%)、ClassⅤが8例(17.8%)、ClassⅢaが6例(13.3%)であった。

また子宮体がんでは子宮頸部細胞診において、ClassⅡとClassⅢb、ClassⅤが各1例であった。ClassⅡは臨床診断要治療者から発見された。

(表31) 子宮頸がんにおける頸部細胞診判定 (平成12～15年度)

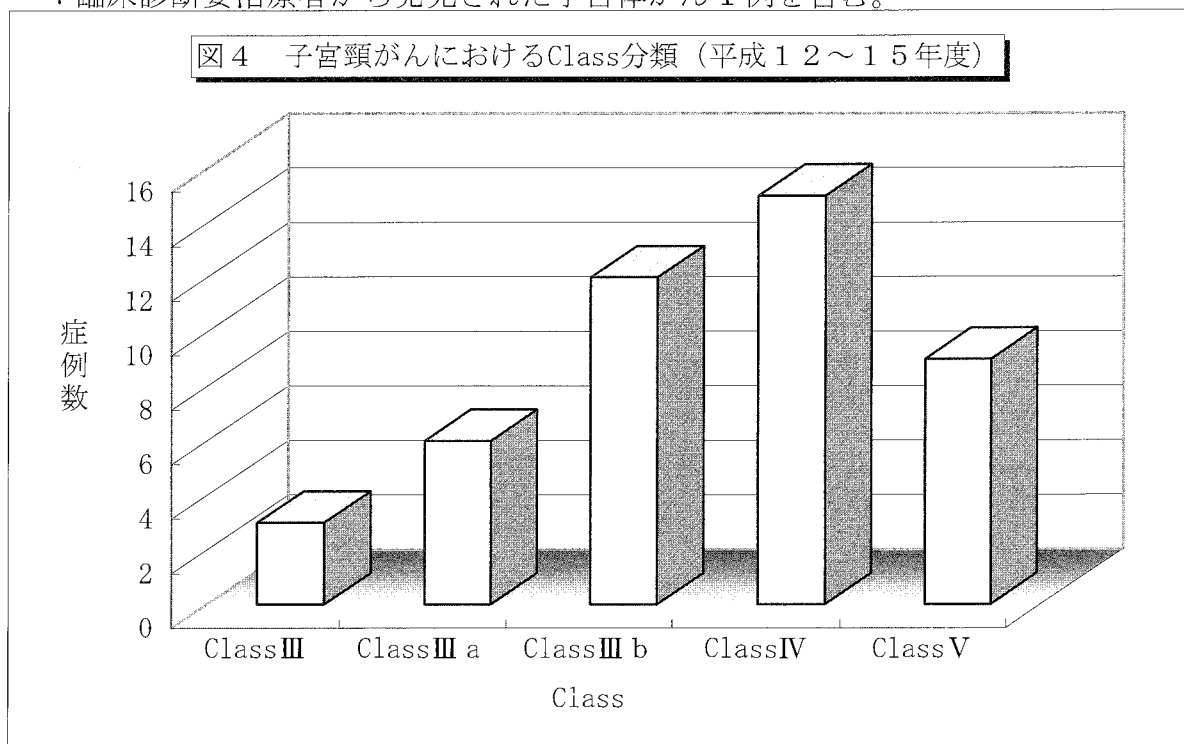
Class分類	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成12～15年度計	
					症例数	構成比(%)
ClassⅢ	1	1	1	0	3	6.7
ClassⅢ a	2	1	3	0	6	13.3
ClassⅢ b	3	2	3	4	12	26.7
ClassⅣ	8	5	1	2	16	35.6
ClassⅤ	3	1	2	2	8	17.8
計	17	10	10	8	45	100.0

(表32) 子宮体がんにおける細胞診判定 (平成12～15年度)

判定	平成12年度	平成15年度
※ ClassⅡ	0	* 1
※ ClassⅢ b	1	0
※ ClassⅤ	1	0
計	2	1

※Classは子宮頸部細胞診での結果。

*臨床診断要治療者から発見された子宮体がん1例を含む。



2. 進行期分類

平成12～15年度の確定子宮がんの進行期分類の集計を表33、34、図5に示した。

子宮頸がんの臨床進行期は0期が最も多く24例(54.5%)、次いでI a 1期が9例(20.5%)、またI b 1期が7例(15.9%)であった。

また子宮体がんの手術進行期はII b期、III a期、III c期が各1例であった。

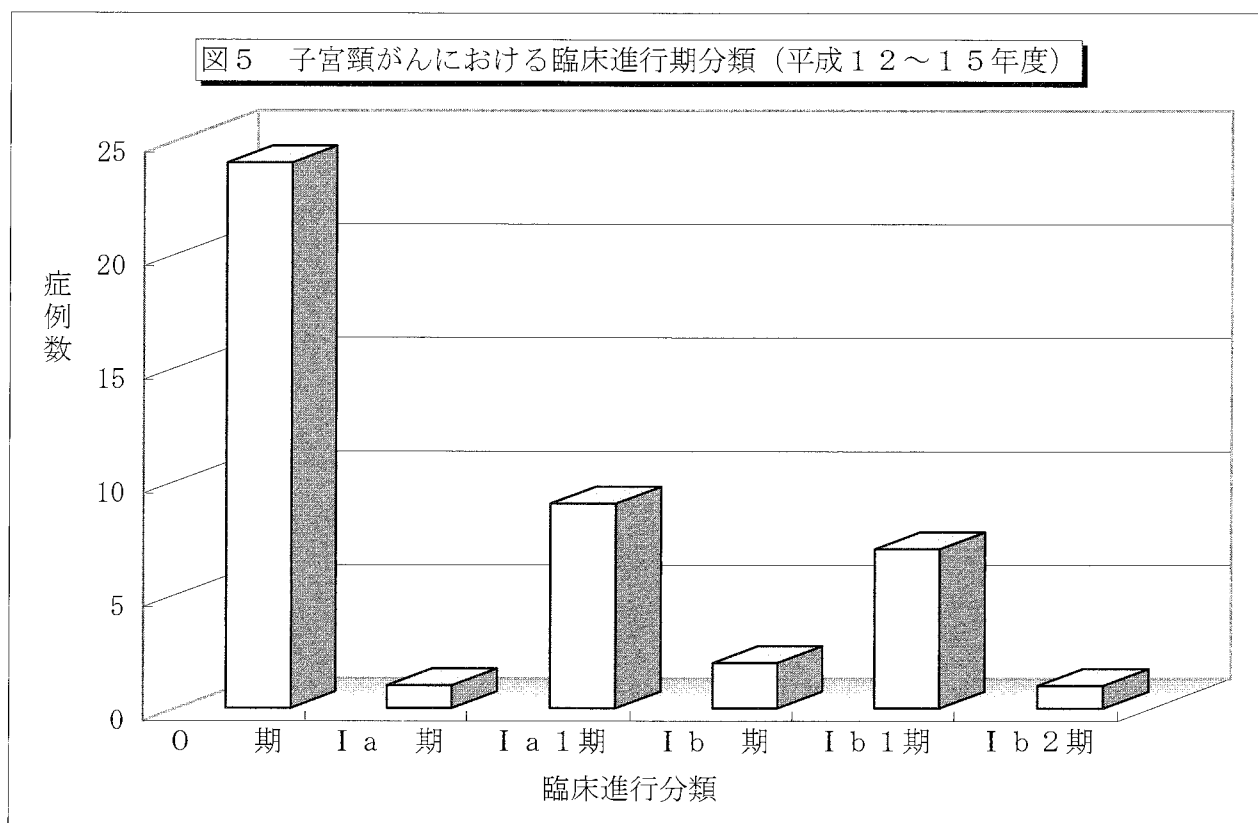
(表33) 子宮頸がんにおける臨床進行期 (平成12～15年度)

臨床進行期	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成12～15年度計	
					症例数	構成比(%)
0期	11	3	7	3	24	54.5
I a 期	0	1	0	0	1	2.3
I a 1期	3	3	2	1	9	20.5
I b 期	1	1	0	0	2	4.5
I b 1期	2	2	1	2	7	15.9
I b 2期	0	0	0	1	1	2.3
計	17	10	10	7	44	100

※平成15年度1人の治療不明者を除く

(表34) 子宮体がんにおける手術進行期 (平成12～15年度)

手術進行期	平成12年度	平成15年度
II b期	1	0
III a期	1	0
III c期	0	1
計	2	1



3. 受診歴と進行期分類

平成12～15年度の確定子宮がんの受診歴と進行期分類の集計を、表35、36、図6に示した。

発見年より過去5年以上受診歴がない場合は初回受診とし、初回受診の0期が最も多く14例(31.8%)、次いで繰り返し受診の0期が10例(22.7%)であった。

また子宮体がんでは初回受診のⅡb期、Ⅲc期が各1例、繰り返し受診のⅢa期が1例であった。

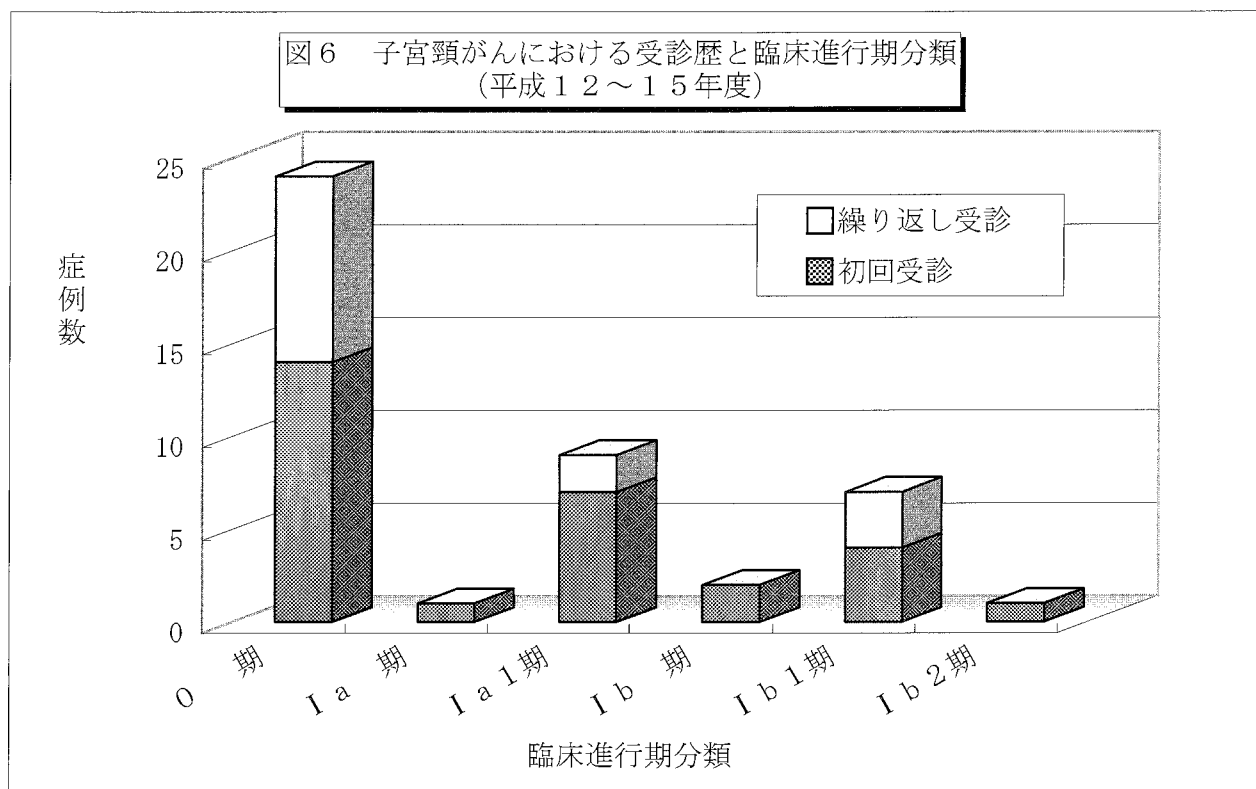
(表35) 子宮頸がんにおける受診歴と臨床進行期 (平成12～15年度)

臨床進行期	初回受診		繰り返し受診	
	症例数	構成比(%)	症例数	構成比(%)
0期	14	31.8	10	22.7
Ia期	1	2.3	0	0.0
Ia1期	7	15.9	2	4.5
Ib期	2	4.5	0	0.0
Ib1期	4	9.1	3	6.8
Ib2期	1	2.3	0	0.0
計	29	65.9	15	34.1

※平成15年度1人の治療不明者を除く

(表36) 子宮体がんにおける受診歴と手術進行期 (平成12～15年度)

手術進行期	初回受診	繰り返し受診
Ⅱb期	1	0
Ⅲa期	0	1
Ⅲc期	1	0
計	2	1



4. 組織分類

平成12～15年度の確定子宮がんの組織分類の集計を、表37、38、図7に示した。

子宮頸がんでは上皮内癌が最も多く24例(54.5%)、次いで微小浸潤癌が10例(22.7%)、腺癌が6例(13.6%)であった。

また子宮体がんでは明細胞癌が2例、内膜腺癌が1例であった。

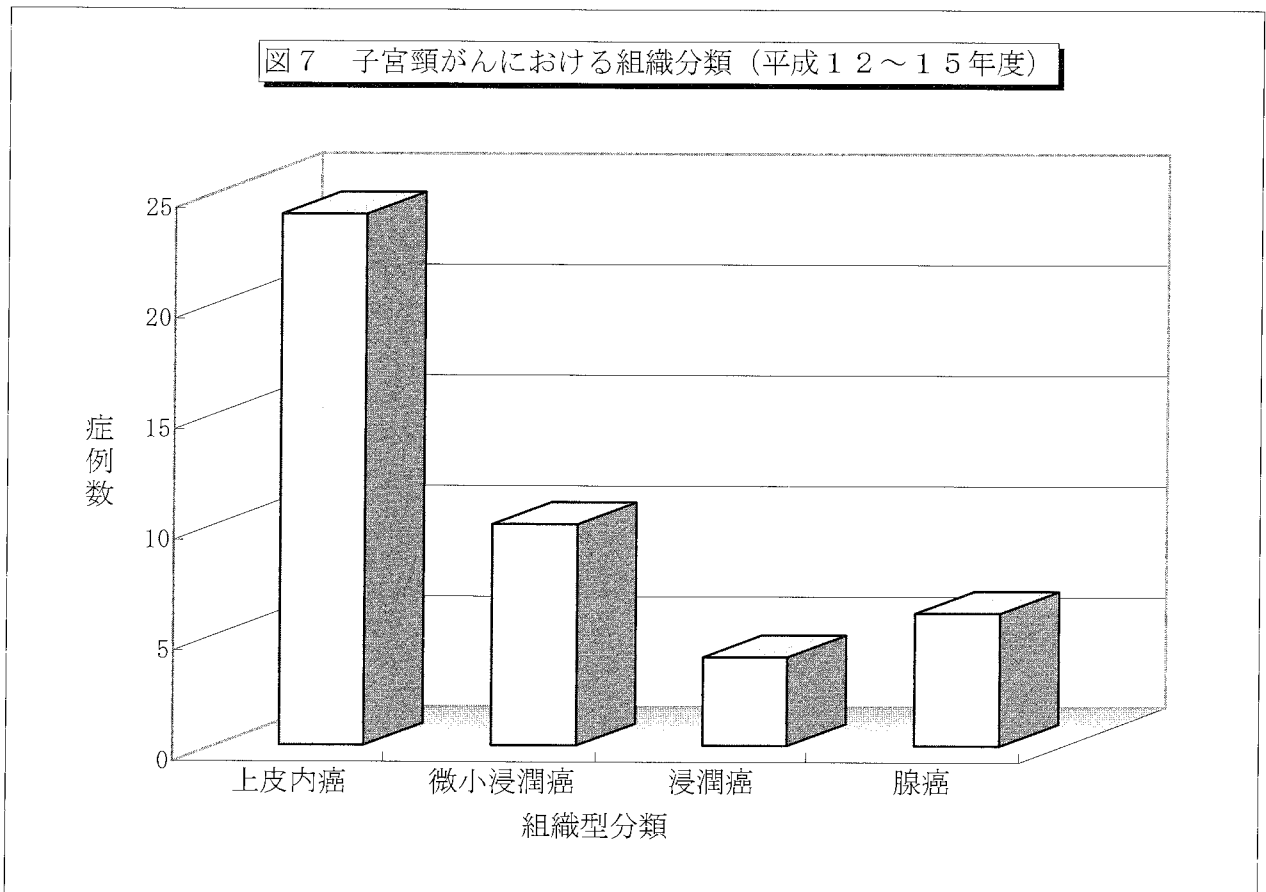
(表37) 子宮頸がんにおける組織分類 (平成12～15年度)

組織分類	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成12～15年度計		
					症例数	構成比(%)	
扁平 上皮 癌	上皮内癌	11	3	7	3	24	54.5
	微小浸潤癌	3	4	2	1	10	22.7
	浸潤癌	1	0	1	2	4	9.1
腺癌	2	3	0	1	6	13.6	
計	17	10	10	7	44	100.0	

※平成15年度1人の治療不明者除く

(表38) 子宮体がんにおける組織分類 (平成12～15年度)

組織分類	平成12年度	平成15年度
腺癌 (明細胞癌)	2	0
腺癌 (内膜腺癌)	0	1
計	2	1



5. 手術の術式（術名）

平成12～15年度の確定子宮がんの手術の術式の集計を表39、40、41、図8に示した。

子宮頸がんでは単純全摘が最も多く24例(54.5%)、次いで円錐切除のみが8例(18.2%)、広汎全摘が7例(15.9%)であった。また手術における併用治療として、放射線治療（術後照射）が3例(6.8%)と化学療法が4例(9.1%)行われた。放射線治療が行われた最も多い術式は広汎全摘で2例(4.5%)、化学療法では広汎全摘が3例(6.8%)であった。

また子宮体がんでは単純全摘が1例、準広汎+リンパ節郭清が2例であった。準広汎+リンパ節郭清の1例は放射線治療が併用された。

(表39) 子宮頸がんにおける手術の術式（平成12～15年度）

手術の術式	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成12～15年度計	
					症例数	構成比(%)
円錐切除のみ	2	1	3	2	8	18.2
単純全摘	11	6	5	2	24	54.5
準広汎	1	0	2	0	3	6.8
準広汎+リンパ節郭清	1	0	0	1	2	4.5
広汎全摘	2	3	0	2	7	15.9
計	17	10	10	7	44	100.0

※平成15年度1人の治療不明者を除く

(表40) 子宮頸がんにおける手術の術式および併用治療（平成12～15年度）

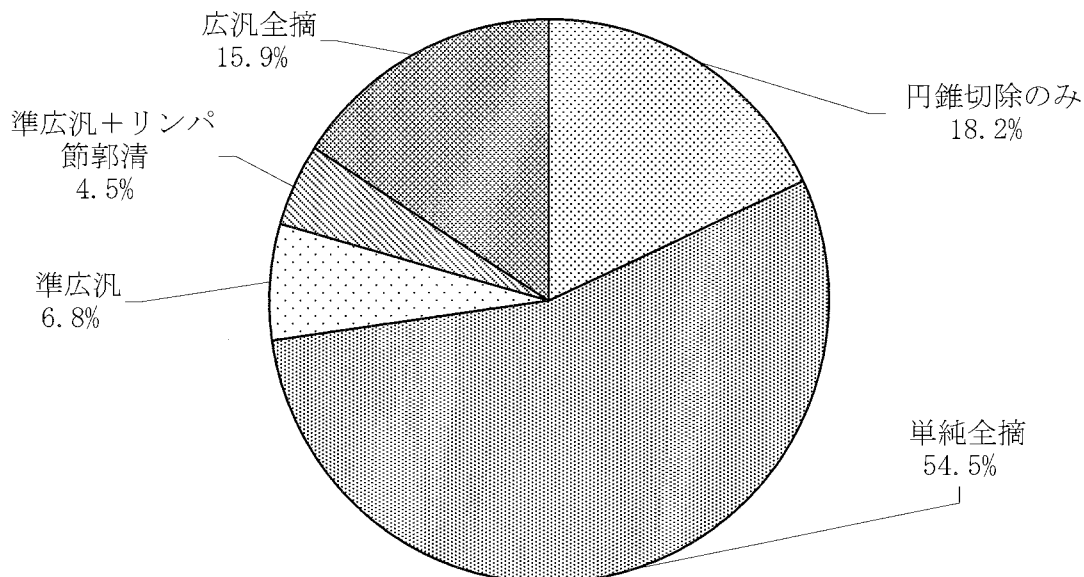
手術の術式	準広汎		準広汎+リンパ		広汎全摘		平成12～15年度計	
	症例数	構成比(%)	症例数	構成比(%)	症例数	構成比(%)	症例数	構成比(%)
放射線治療（術後照射）	1	2.3	0	0.0	2	4.5	3	6.8
化学療法	0	0.0	1	2.3	3	6.8	4	9.1

(表41) 子宮体がんにおける手術の術式（平成12～15年度）

手術の術式	平成12年度	平成15年度
単純全摘	1	0
準広汎+リンパ節郭清	1	*
計	2	1

*平成15年度の1例は放射線治療の併用有り

図8 子宮頸がんにおける手術の術式（平成12～15年度）



6. 進行期分類と手術の術式

平成12～15年度の確定子宮がんの進行期分類と手術の術式の集計を表42、43、44、図9に示した。

子宮頸がんでは0期の単純全摘が最も多く17例(38.6%)、次いで0期の円錐切除のみとIa1期の単純全摘が各7例(15.9%)であった。Ib1期では広汎全摘が5例(11.4%)と多かった。また併用治療として行われた放射線治療(術後照射)と化学療法では、Ib1期の広汎全摘で化学療法が3例(6.8%)と最も多く、放射線治療ではIb1期の準広汎と広汎全摘、Ib2期の広汎全摘が各1例(2.3%)であった。

また子宮体がんではIIb期の単純全摘が1例、IIIa期とIIIc期では準広汎+リンパ節郭清が各1例であった。IIIc期の準広汎+リンパ節郭清において放射線治療が行われた。

(表42) 子宮頸がんにおける臨床進行期分類と手術の術式(平成12～15年度)

子宮頸がん	0期		Ia期		Ia1期		Ib期		Ib1期		Ib2期	
	症例数	構成比(%)	症例数	構成比(%)	症例数	構成比(%)	症例数	構成比(%)	症例数	構成比(%)	症例数	構成比(%)
円錐切除のみ	7	15.9	1	2.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
単純全摘	17	38.6	0	0.0	7	15.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0
準広汎	0	0.0	0	0.0	2	4.5	0	0.0	1	2.3	0	0.0
準広汎+リンパ節郭清	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	2.3	1	2.3	0	0.0
広汎全摘	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	2.3	5	11.4	1	2.3
計	24	54.5	1	2.3	9	20.5	2	4.5	7	15.9	1	2.3

※平成15年度1人の治療不明者を除く

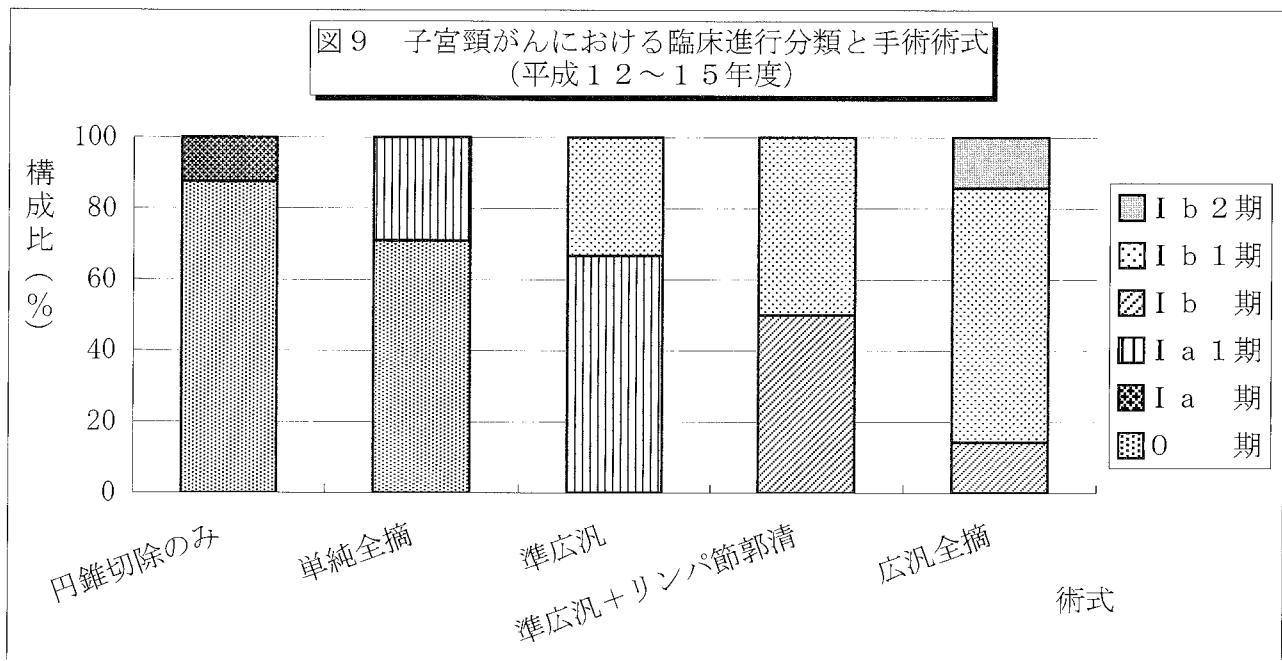
(表43) 子宮頸がんにおける臨床進行期分類と手術の術式および併用治療(平成12～15年度)

子宮頸がん	Ib期		Ib1期				Ib2期	
	準広汎+リンパ節郭清		準広汎		広汎全摘		広汎全摘	
	症例数	構成比(%)	症例数	構成比(%)	症例数	構成比(%)	症例数	構成比(%)
放射線治療(術後照射)	0	0.0	1	2.3	1	2.3	1	2.3
化学療法	1	2.3	0	0.0	3	6.8	0	0.0

(表44) 子宮体がんにおける手術進行期分類と手術の術式(平成12～15年度)

子宮体がん	IIb期	IIIa期	IIIc期
単純全摘	1	0	0
準広汎+リンパ節郭清	0	1	* 1
計	1	1	1

*放射線治療の併用有り



7. 組織分類と手術の術式

平成12～15年度の確定子宮がんの組織分類と手術の術式の集計を表45、46、47、図10に示した。

子宮頸がんでは上皮内癌の単純全摘が最も多く17例(38.6%)、次いで上皮内癌の円錐切除のみと微小浸潤癌の単純全摘が各7例(15.9%)、腺癌では広汎全摘が5例(11.4%)と多かった。また併用治療として行われた放射線治療(術後照射)と化学療法では、腺癌の広汎全摘で放射線治療と化学療法が各2例(4.5%)と最も多く、扁平上皮癌(浸潤癌)では準広汎の放射線治療で1例(2.3%)、広汎全摘の化学療法で1例(2.3%)であった。

また子宮体がんでは明細胞癌の単純全摘と準広汎+リンパ節郭清が各1例、内膜腺癌の準広汎+リンパ節郭清が1例であった。内膜腺癌の準広汎+リンパ節郭清において放射線治療が行われた。

(表45) 子宮頸がんにおける組織分類と手術の術式(平成12～15年度)

子宮頸がん	扁平上皮癌						腺癌	
	上皮内癌		微小浸潤癌		浸潤癌			
	症例数	構成比(%)	症例数	構成比(%)	症例数	構成比(%)	症例数	構成比(%)
円錐切除のみ	7	15.9	1	2.3	0	0.0	0	0.0
単純全摘	17	38.6	7	15.9	0	0.0	0	0.0
準広汎	0	0.0	2	4.5	1	2.3	0	0.0
準広汎+リンパ節郭清	0	0.0	0	0.0	1	2.3	1	2.3
広汎全摘	0	0.0	0	0.0	2	4.5	5	11.4
計	24	54.5	10	22.7	4	9.1	6	13.6

※平成15年度1人の治療不明者除く

(表46) 子宮頸がんにおける組織分類と手術の術式および併用治療(平成12～15年度)

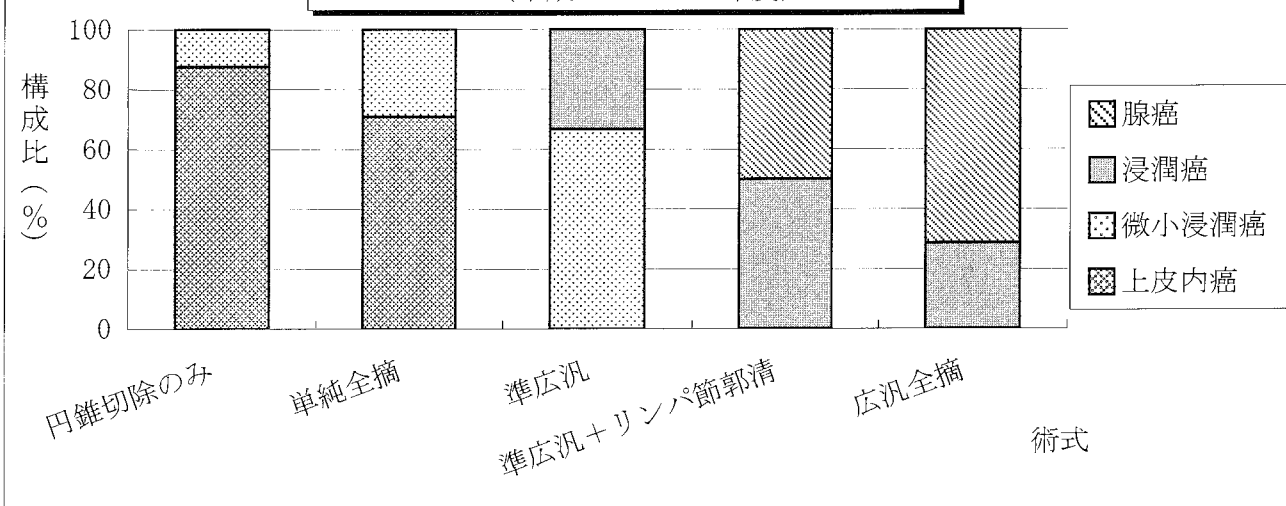
子宮頸がん	扁平上皮癌(浸潤癌)				腺癌			
	準広汎		広汎全摘		準広汎+リンパ		広汎全摘	
	症例数	構成比(%)	症例数	構成比(%)	症例数	構成比(%)	症例数	構成比(%)
放射線治療(術後照射)	1	2.3	0	0.0	0	0.0	2	4.5
化学療法	0	0.0	1	2.3	1	2.3	2	4.5

(表47) 子宮体がんにおける組織分類と手術の術式(平成12～15年度)

子宮体がん	明細胞癌	内膜腺癌
単純全摘	1	0
準広汎+リンパ節郭清	1	*
計	2	1

*放射線治療の併用有り

図10 子宮頸がんにおける組織分類と手術術式(平成12～15年度)



D. 受診歴からみた年代別受診者構成と 確定子宮がん(平成15年度)

平成15年度の年代別子宮がん検診の受診者と確定子宮がんの受診歴の集計を表48、49、図11、12に示した。

当事業団の前身である旧成人病予防協会が運営主体となった平成11年度以降のデータを使用し、過去5年の受診歴を調査できる平成15年度のみで傾向を示した。

受診者の年代別構成は60～64歳が最も多く、次いで65～69歳、55～59歳と続き、50歳以上の受診者は全体の約70%を占めている。また50歳以上では初回受診者の割合は20%前後となっている。

50歳未満の受診者数は全体の約30%だが、がん発見率は0.06%と高く、初回受診者の割合は30%以上を占める。

平成15年度の確定子宮がんは9例発見され、その内治療不明者1名を除いた8例の中で子宮頸がんの7例は0期とI期の早期発見であった。子宮体がんの1例は臨床診断要治療者から発見され、IIIc期であった。また受診歴をみると初回受診者が5例と多かった。

(表48) 子宮がん検診受診者の受診歴と確定子宮がん(平成15年度)

区分	受診者数 (人)	確定 子宮がん 発見率 (%)	初回受診者		繰り返し受診者	
			受診者数 (人)	確定子宮 がん数	受診者数 (人)	確定子宮 がん数
30歳未満	102	0.00	98	0	4	0
30～34歳	1,502	0.00	963	0	539	0
35～39歳	2,366	0.08	946	1	1,420	1
40～44歳	2,572	0.12	768	2	1,804	1
45～49歳	2,441	0.04	559	1	1,882	0
50～54歳	3,188	0.00	700	0	2,488	0
55～59歳	3,740	0.00	706	0	3,034	0
60～64歳	4,285	0.00	792	0	3,493	0
65～69歳	4,007	0.05	599	※ 2	3,408	0
70～74歳	3,112	0.03	391	0	2,721	1
75～79歳	1,212	0.00	175	0	1,037	0
80歳以上	213	0.00	32	0	181	0
計	28,740	0.03	6,729	6	22,011	3

※子宮体がんを1例含む

(表49) 確定子宮がんの受診歴別臨床進行期(平成15年度)

受診歴	子宮頸がん				子宮体がん	計
	I 期	I a 2期	I b 1期	I b 2期	* III c 期	
初回受診者	1	1	1	1	1	5
繰り返し受診者	2	0	1	0	0	3

治療不明者1人除く

過去5年以内に受診歴がない場合は初回受診者とする。

*臨床診断要治療者から発見された子宮体がんを1例含む

図 1 1 年代別子宮がん検診受診者の受診歴とがん発見率
(平成 1 5 年度)

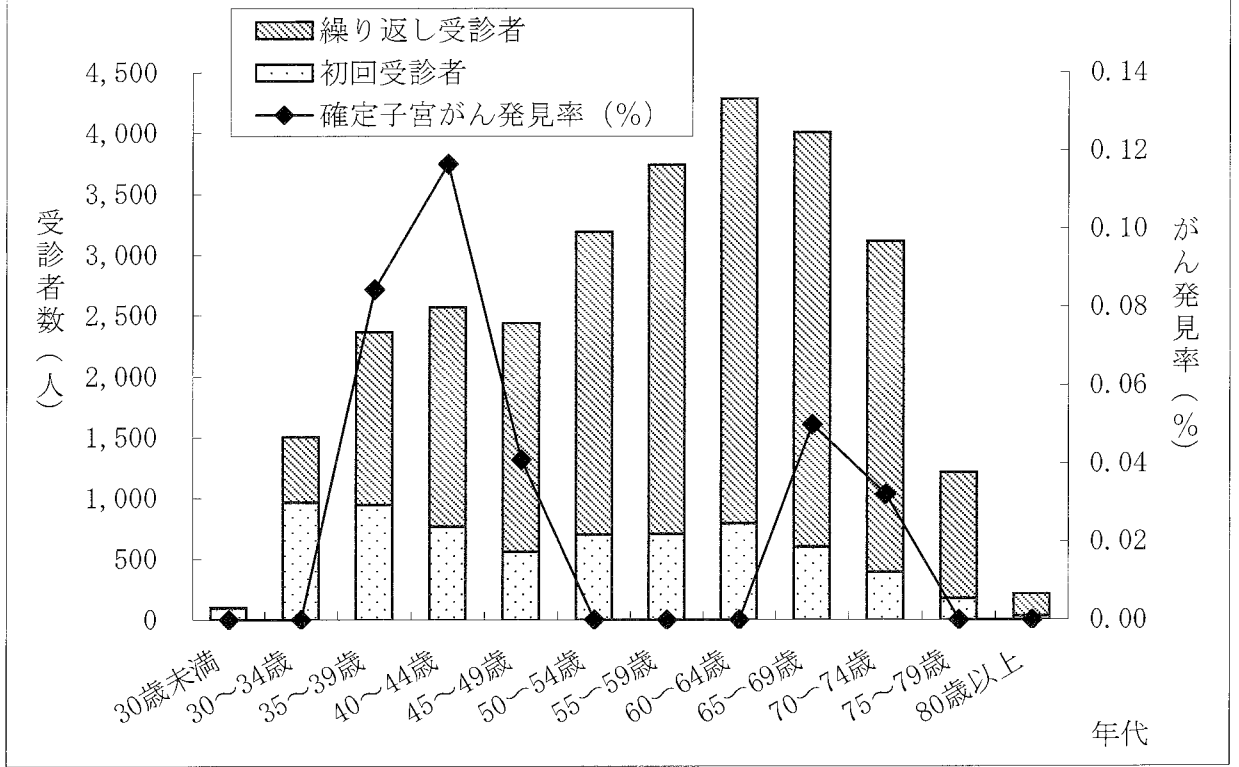
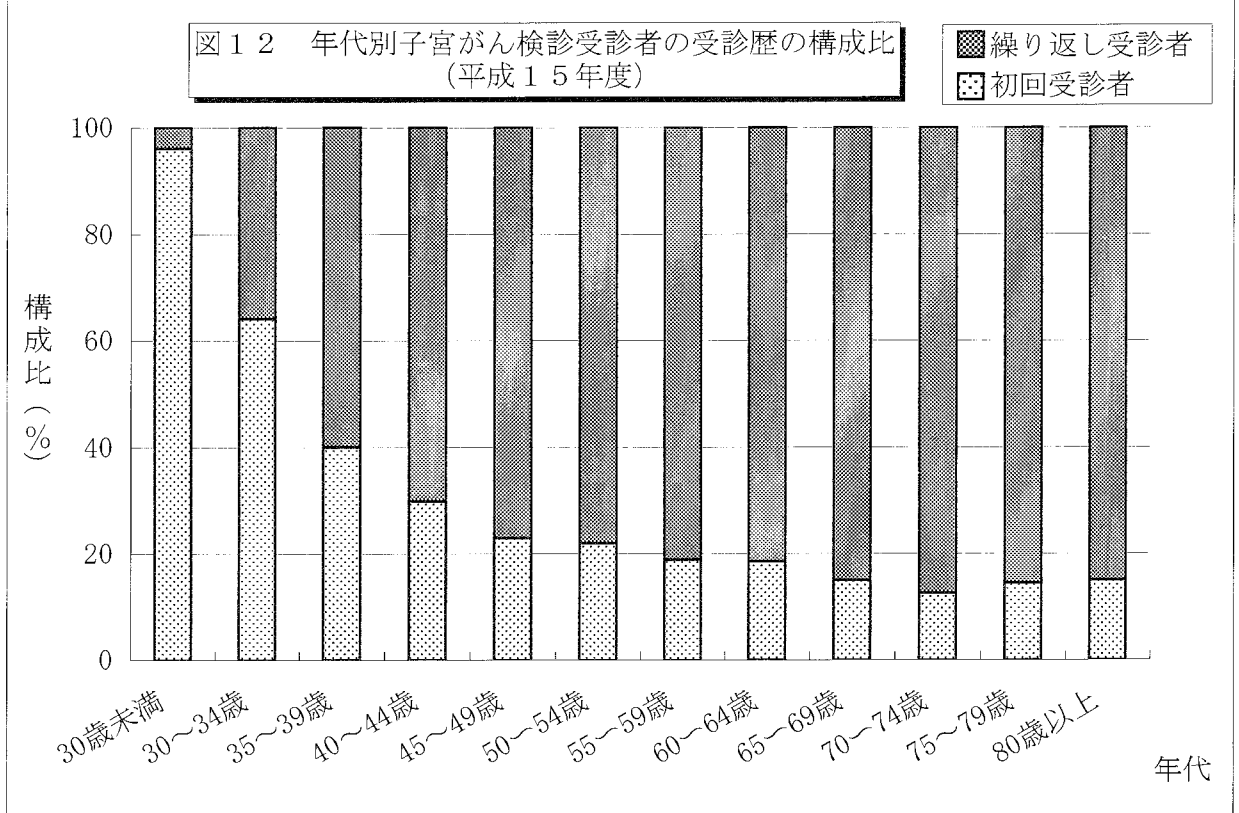


図 1 2 年代別子宮がん検診受診者の受診歴の構成比
(平成 1 5 年度)



VI 平成12～15年度発見子宮がん追跡調査結果

平成12～15年度では子宮がん集団検診受診者総数111,738名の中から、細胞診で要精検（子宮頸がん検診でClassⅢ、子宮体がん検診で疑陽性以上）となった方は419名（要精検率0.37%）であった。その中から子宮体がん2例含む49例の子宮がん（陽性的中度13.4%）が発見された。また平成15年度の臨床診断要治療者（要精検率3.60%）の中から子宮体がんが1例発見され、平成12～15年度で計50例の子宮がんが発見された。

長野県健康づくり事業団では検診で発見された子宮がんについて、医療機関のご協力を得て追跡調査を行った。その結果、確定された子宮頸がん45例、子宮体がん3例の計48例（発見率0.04%）について概要を示す。

以下これらの分析結果につき略記します。

1. 年齢構成

発見時年齢で見ると30～71歳の受診者から発見されており、全体では平均年齢47.9歳、子宮頸がんでは47.1歳、子宮体がんでは59.0歳であった。発見された子宮がんが最も多い年代は35～39歳と40～44歳で各10例であった。50歳未満で31例発見されており、構成比64.6%、がん発見率は0.09%であった。

2. 受診歴

初回受診者が31例（構成比64.6%）、繰り返し受診者が17例（35.4%）であった。

3. 細胞診

子宮頸がんはClassⅢが3例、ClassⅢaが6例、ClassⅢbが12例、ClassⅣが16例、ClassⅤが8例であった。子宮体がんは子宮頸部細胞診でClassⅡとClassⅢb、ClassⅤが各1例であった。ClassⅡは臨床診断要治療者から発見された。

4. 精密検査

子宮頸がん45例のうち40例にコルポ診がおこなわれ、そのうち34例がコルポ診と生検、2例がコルポ診のみで、4例はコルポ診と円錐切除と生検がおこなわれた。5例は生検のみであった。

5. 組織診断

子宮頸がんの生検の組織診断は異形成が5例、上皮内癌が26例、微小浸潤癌が3例、浸潤癌（腺癌）が5例、浸潤癌（扁平上皮癌）が4例、腺癌が1例、微小浸潤癌・浸潤癌が1例であった。子宮体がんでは腺癌が2例、上皮内癌が1例であった。

6. 治療状況

治療不明者1名を除き、47例（子宮体がん3例含む）は手術を受けている。

7. 進行期分類

子宮頸がんの臨床進行期は0期が24例（構成比54.5%）、I a期が1例（2.3%）、I a 1期が9例（20.5%）、I b期が2例（4.5%）、I b 1期が7例（15.9%）、I b 2期が1例（2.3%）であった。子宮体がんの手術進行期はII b期とIII a期、III c期が各1例だった。

受診歴との関係は、初回受診者では0期が14例（構成比31.8%）、I a期が8例（18.2%）、I b期が7例（15.9%）であった。繰り返し受診者では0期が10例（22.7%）、I a期が2例（4.5%）、I b期が3例（6.8%）であった。子宮体がんでは初回受診者のII b期とIII c期が各1例、繰り返し受診者のIII a期が1例だった。

8. 治療法（術式）

（表50）子宮頸がん術式

円錐切除のみ	単純全摘	準広汎	準広汎＋リンパ節	広汎全摘
8	24	3	2	7

子宮体がんでは単摘が1例、準広汎＋リンパ節郭清が2例であった。

（表51）子宮頸がん術式と臨床進行期

	0期	I a期	I a 1期	I b期	I b 1期	I b 2期
円錐切除のみ	7	1	0	0	0	0
単純全摘	17	0	7	0	0	0
準広汎	0	0	2	0	1	0
準広汎＋リンパ節	0	0	0	1	1	0
広汎全摘	0	0	0	1	5	1

子宮体がんではII b期で単摘が1例、III a期とIII c期で準広汎＋リンパ節郭清が各1例であった。

（表52）子宮頸がん術式と組織分類

	扁平上皮癌			腺癌
	上皮内癌	微小浸潤癌	浸潤癌	
円錐切除のみ	7	1	0	0
単純全摘	17	7	0	0
準広汎	0	2	1	0
準広汎＋リンパ節	0	0	1	1
広汎全摘	0	0	2	5

子宮体がんでは明細胞癌の単摘が1例、準広汎＋リンパ節郭清が1例、内膜腺癌の準広汎＋リンパ節郭清が1例であった。

子宮頸がんの手術における併用治療として、放射線治療（術後照射）が3例（6.8%）と化学療法が4例（9.1%）行われた。術式における臨床進行期と組織分類にみる併用治療の集計を表53に示した。

（表53）子宮頸がん術式における臨床進行期と組織分類にみる併用治療

術式	臨床進行期	最終組織診断	併用治療	症例数
準広汎	I b 1	扁平上皮癌（浸潤癌）	放射線治療（術後照射）	1
準広汎＋リンパ節	I b	腺癌	化学療法	1
広汎全摘	I b 1	扁平上皮癌（浸潤癌）	化学療法	1
	I b 1	腺癌	放射線治療（術後照射）	1
	I b 1	腺癌	化学療法	2
	I b 2	腺癌	放射線治療（術後照射）	1

子宮体がんではⅢc期の内膜腺癌で準広汎＋リンパ節郭清が1例あり、放射線治療を併用した。

9. 最終組織診断

子宮頸がんの組織診断では上皮内癌が24例（構成比54.5%）、微小浸潤癌が10例（22.7%）、浸潤癌が4例（9.1%）、腺癌が6例（13.6%）であった。子宮体がんは腺癌（明細胞癌）が2例、腺癌（内膜腺癌）が1例であった。

10. 子宮がん検診受診者

平成12年度と比べると、平成15年度の受診者数は約2500名増加している。しかし発見された子宮がんは半数となっている。平成15年度の受診者の年代別受診歴をみると、50歳以上の受診者について受診者の固定化が進んでおり、がん発見率の低下が懸念される。今後は新規受診者の開拓が課題であると考えられる。

11. 総括（委員長 野口 浩）

子宮がん集団検診の年間受診者は平成12年の26,285人から平成15年は28,740人と若干増加しています。この4年間に発見された確定子宮がんは48例（子宮頸がん45例、子宮体がん3例）でした。確定子宮頸がんの受診歴を見ますと45例中29例（64.4%）は初回受診でした。また11名（24.4%）は前年に受診、4名（8.9%）は2・3年以内に受診していました。このデータから子宮がん検診の効率を上げるためには未受診者の勧誘が大切であると同時に、発見がん患者の約1/3が前年～2・3年以内の受診歴があることから、厚生労働省の“子宮がん検診は隔年検診でよい”とする指針には疑問を呈せざるを得ません。

もう一つ気になることは組織型の問題です。従来子宮頸がんは大部分が扁平上皮癌で腺癌は10%以下でしたが、最近腺癌の増加が言われています。平成11年の成績では18例中2例（11.1%）でしたが、今回の45例では6例（13.3%）と少し高率です。腺癌とくに初期癌では細胞診での診断は扁平上皮癌に比べ、やや難しいとされており、この点も隔年検診に対する不安要因の一つです。治療された子宮頸がん44例の最終組織診断を見ますと、上皮内癌が24例（54.5%）、微小浸潤癌が10例（22.7%）、浸潤癌10例（22.7%）で、0期・Ia期の初期癌が77.3%を占めています。検診では多くの初期癌が発見されますが、この場合縮小した術式でも100%の治癒が期待できるという大きなメリットがあります。なお浸潤癌の10例も全て比較的初期であるIb期で、十分5年治癒は期待できます。

VII 子宮がん集団検診使用様式

- ① 子宮がん検診申込書
- ② 婦人（子宮がん）検診票
- ③ 乳房・子宮セット検診票
- ④ 診療依頼票（子宮検査票）
- ⑤ 子宮集団検診受診者連名簿
- ⑥ 子宮頸がん検診追跡調査票

平成 年度 子宮がん検診 申込書

平成 年 月 日

財団法人 長野県健康づくり事業団理事長 殿

〒
所在地

市町村名
事業所名

TEL
FAX

担当者 所属
氏名

下記の予定により、子宮検診を実施したいので申し込みます。

記

実施希望 月日(曜日)	予定人員	乳房セツ希望 ○× (視触診+超音波)	対象地区	備 考
/ ()	人			
/ ()	人			
/ ()	人			
/ ()	人			
/ ()	人			
/ ()	人			
/ ()	人			
/ ()	人			
/ ()	人			
/ ()	人			
/ ()	人			
/ ()	人			
/ ()	人			
/ ()	人			
/ ()	人			
/ ()	人			
合計日数	日		日	

要望欄

※平成 年度の方法は(毎年・隔年)受診です。(どちらかに○印をお願いします。)

1. 検診人員 精度管理上、1日の実施人数は概ね60人以内でお願いします。
マンモグラフィとのセツ検診は行えませんので、ご了承ください。
2. 提出期限 検診医師の日程調整のため、平成 年 月 日()までに
ご提出をお願いします。

※検診車等の都合によりご希望日に実施できない場合もありますので、予めご了承ください。
実施日程については、後日当事業団からご連絡し調整させていただきます。

担当 女性検診課
TEL(026)286-6407
FAX(026)286-6412
mail @kenkou-nagano.or.jp

乳房・子宮セット検診票

太枠内をシャープペンシル（鉛筆）で記入してください。

：：：：：：：：：：：：：：

：：：：：：：：：：：：：：

乳房No.

乳房 No.

フリガナ	生 年 月 日	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	年	<input type="text"/>	月	<input type="text"/>	日	
氏 名	(歳)	電 話 番 号	<input type="text"/>								
世帯主	住 所 〒 <input type="text"/> - <input type="text"/>		管理番号	<input type="text"/>							マンモ <input type="checkbox"/>
(3年以内の住所変更)前の住所			地区所属	<input type="text"/>							区分 <input type="text"/>

乳房自己検診
 知っている
 知らない

乳房検診は初めてですか? はい・いいえ	血縁者の乳癌 なし <input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/>	続柄 <input type="text"/>	結婚歴 未婚 <input type="checkbox"/> 結婚年齢(初婚) <input type="text"/> 歳	授乳歴(末子) あり <input type="checkbox"/> なし <input type="checkbox"/> 授乳中 <input type="checkbox"/>	実行している <input type="checkbox"/> 実行していない <input type="checkbox"/>
------------------------	---	-------------------------	--	--	---

乳房の既往歴	乳腺炎 <input type="checkbox"/>	線維腺腫 <input type="checkbox"/>	乳腺症 <input type="checkbox"/>	その他 <input type="checkbox"/>	乳房手術の既往 <input type="checkbox"/>	自身の乳癌 <input type="checkbox"/>	乳房自覚症状	変形 <input type="checkbox"/>	しこり <input type="checkbox"/>	分泌物 <input type="checkbox"/>	乳頭びらん <input type="checkbox"/>	圧痛 <input type="checkbox"/>	リンパ節はれ <input type="checkbox"/>	その他 <input type="checkbox"/>
--------	------------------------------	-------------------------------	------------------------------	------------------------------	----------------------------------	--------------------------------	--------	-----------------------------	------------------------------	------------------------------	--------------------------------	-----------------------------	---------------------------------	------------------------------

右 視触診所見

硬結 無・有

腫瘤 無・有

数 単発・多数 (個)

大きさ cm×cm

硬度 硬・軟

エクボ 無・有

左 視触診所見

硬結 無・有

腫瘤 無・有

数 単発・多数 (個)

大きさ cm×cm

硬度 硬・軟

エクボ 無・有

乳頭びらん 無・有

乳頭異常分泌 無・有 潜血反応 (+・±・-)

乳頭びらん 無・有

乳頭異常分泌 無・有 潜血反応 (+・±・-)

視触診診断 a b c d

超音波検査 不要 要

超音波診断

精密検査 不要 要

視触診診断 a b c d

超音波検査 不要 要

超音波診断

精密検査 不要 要

EC SE 右 A B C C' D E 分泌 技師

左 A B C C' D E 分泌 技師

氏名

乳房No.

子宮No.

乳房受診歴	視触診	前回 右	左	前々回 右	左	3回前 右	左
	超音波						
	部位						
	診断						
	集検結果						
	精検理由						
	精検部位						
	診断						

過去3回の受診歴です。

□ □

検診年月日

裏面もご覧ください。

市町村または事業所名

子宮No

子宮 No. □ □ □ □ □ □

フリガナ
氏名 (歳)

子宮がん検診は今回が初めてですか? はい・いいえ 前回の結果

妊娠歴
なし ○ 妊娠 □ □ 回 分娩 □ □ 回 [帝王切開 □ □ 回] 初産 □ □ 歳 最後の分娩 □ □ 歳 最後の妊娠 □ □ 歳

婦人科の既往 膣炎 ○ 頸管ポリープ ○ その他 ○ 婦人科の手術 子宮摘出 ○ 卵巣摘出 両方 ○ 片方 ○
なし ○ 子宮筋腫 ○ 卵巣嚢腫 ○ []

月経歴 (手術での閉経含む) 最近の月経 閉経年齢 月経周期 生理不順ですか? 結婚歴
初潮 □ □ 歳 閉経 □ □ 歳 → □ □ 歳 月 日から □ □ 日型 生理不順ですか? はい ○ 結婚年齢(初婚) □ □ 歳

子宮自覚症状等
① 性器出血 (6ヶ月以内経除) 色は? 鮮血 ○ うすい血 ○ 黒ずんだ血 ○ その他 ○
量は? 多量 ○ やや多い ○ 少量 ○ 微量 ○ 回数? 一度だけ ○ 時々 ○ 続いて ○
いつ? 接触時 ○ 排便時 ○ 排尿時 ○ 自然 ○
② おりもの 色は? 白色 ○ 黄色 ○ 褐色 ○
ピンク色 ○ 血性 ○
回数? 一度だけ ○ 時々 ○ 続いて ○
③ かゆみ なし ○ あり ○
④ ホルモン剤の服用 なし ○ あり ○

体がん対象
1. 所見 (1)外陰異常 有・無 (2)膣異常 有・無 (3)子宮異常 有・無 (4)付属器異常 有・無 (5)その他
2. 分泌物 白・黄・粘・褐・血・泡沫状
3. 膣壁 正常・発赤・出血斑
4. 検体採取部位 頸管部 ○ 膣部 ○ 体部 ○
臨床診断 異常なし ▶ ○
膣部 ▶ 治療要 ○ 経過観察 ○ 治療不要 ○
頸管ポリープ ▶ ○ ○ ○
子宮筋腫 ▶ ○ ○ ○
老人性膣炎 ▶ ○ ○ ○
膣炎 ▶ ○ ○ ○
細胞診 頸部 I II IIIa III IIIb IV V
体部 陰性 疑陽性 陽性
所見
再検 □ □ カ月後 CT □

財団法人 長野県健康づくり事業団

診 療 依 頼 書

(子宮検査票)

平成 年 月 日

医 療 機 関 長 様

実 施 主 体 名 ・ 首 長 名
(財) 長野県健康づくり事業団 医師 宮下 美生

下記の方は、長野県健康づくり事業団が実施した子宮がん検診において臨床診断の結果治療等が必要と思われますので御高診をお願い致します。

なお、お手数ですが御高診の結果を下欄に御記入のうえ、投函して下さいますようお願い致します。

【一次検診結果】

受 診 番 号		
氏 名	(歳)	
住 所		
生 年 月 日		
細胞診	実施日	
	結 果	
臨 床 所 見		
所 見		

診察結果について

診 断 名 等

指 導 及 び 処 置

診断確定日 平成 年 月 日

施設名

所在地

医師名

[検診機関 (財) 長野県健康づくり事業団]

子宮頸がん検診追跡調査票

1 患者	住所	<hr/>				
	氏名	<hr/>				
	生年月日	年	月	日	(歳)	
2 集団検診	実施年月日	平成	年	月	日	
	受診歴	a 初回	b 繰り返し (前回受診	年)	c 不明	
	細胞診判定	クラス	I	II	III (III a ・ III b)	IV V
3 精密検査	実施機関名	<hr/>				
	受診年月日	平成	年	月	日	
	実施項目	a コルポ診	b 生検 (頸部 ・ その他)	c 円錐切除		
	組織学的診断	a 正常	b 異形成 (軽度 ・ 中等度 ・ 高度)	c 上皮内癌		
		d 微小浸潤癌	e 浸潤癌 (扁平上皮癌 ・ 腺癌)			
		f その他 ()		
	組織診断判定機関 (医師)	<hr/>				
4 治療	a 治療した	b 治療しない	c 不明			
	治療機関名	<hr/>				
	入院・手術年月日	平成	年	月	日	
	治療内容	手術	a 円錐切除	b 単摘	c 準広汎	d 広汎 e その他
		リンパ節郭清	a 行わない	b 骨盤内	c 大動脈	
		放射線治療	a 行わない	b 外照射	c 腔内照射	d 術後照射
		化学療法	a 行わない	b 行った (療法)
	臨床進行期分類	0期	I a 期 (I a 1期 ・ I a 2期)	I b 期 (I b 1期 ・ I b 2期)		
		II a 期	II b 期	III a 期	III b 期	IV a 期 IV b 期
		子宮体癌	(期)	
	最終組織診断	異形成	(軽度 ・ 中等度 ・ 高度)			
		扁平上皮癌	(上皮内癌 ・ 微小浸潤癌 ・ 浸潤癌)			
		腺癌	()	
		腺扁平上皮癌	()	
		その他	()	

(調査機関) 財団法人長野県健康づくり事業団 女性検診課
〒381-2298 長野市稲里町田牧206-1
TEL (026) 286-6407 FAX (026) 286-6412

*臨床進行期分類、組織診断等は子宮頸癌取扱い規約(1997年、金原出版)をご参照ください。

VIII 子宮がん集団検診委員会委員名簿

子宮がん集団検診委員

平成14～16年度

役名	氏名(敬称略)
委員長	野口 浩
委員長代理	山本 豊作
委員	小西 郁生
〃	五十嵐 修三
〃	花岡 暉
〃	坪井 照夫
〃	菅生 元康
〃	小口 治
〃	塩澤 丹里
〃	土屋 眞一
〃	宮島 喜文
〃	宮下 美生

平成12～14年度

役名	氏名(敬称略)
委員長	野口 浩
委員長代理	山本 豊作
委員	小西 郁生
〃	中澤 弘行
〃	五十嵐 修三
〃	山田 眞一
〃	坪井 照夫
〃	菅生 元康
〃	土岐 俊彦
〃	土屋 眞一
〃	宮島 喜文
〃	宮下 美生

おわりに

子宮頸がんの集団検診の課題と今後の展望

長野県健康づくり事業団 子宮がん集団検診委員会
委員長代理 山本 豊作

子宮頸がんの集団検診は、昭和40年代に、細胞診を持って全国的に普及して、初期子宮頸がんの発見には、必須の診断法との立場を確立しております。その結果、上皮内がん、初期浸潤がんなどが多数発見されております。

長野県においての集団検診は昭和45年から始められて、約36年経過したことになります。この事業は関係各機関の継続的努力により普及発展して、女性のクオリティオブライフの向上、健康・保健向上のために役目を果たしてきたと思われま

す。このように全国的に普及し、その必要性も認識されている、子宮頸がんの集団検診も、要となるのは細胞診であり、その精度管理がもっとも重要な課題であることは、昔も今も変わりありません。

お陰様で本県においての精度管理は近年高い水準を保つことが出来ており、大変喜ばしいことと思えます。

現場で関与しているみなさんの細胞診に対するご理解の高さが反映しているものと考えられます。

一見簡単そうに見える細胞診も、その取り扱いを間違えると無力になってしまうので、良好な細胞標本作製するには、多くの注意すべき事項がありますことを改めてご留意いただきたいと思います。

子宮頸がんの発生は、高齢者のみではなく、性経験者の有る女性には、可能性のある疾患とされておりますから、現代の性風俗に鑑み、10才代、20才代の若い女性達も細胞診を受けて、自身の健康管理をするという認識を持っていただきたいものです。

その意味においても、これからの集団検診はより若い年齢層を対象に入れる必要があると考えられます。

そして集団検診で啓発された女性達は、子宮体がん、卵巣がんなどにも高い関心を示しておりますが、これらのことを集団検診で対応するには現実的に不可能でありますので、この範囲のことは施設検診で受け持つことになりましょう。

子宮がん集団検診の実施成績と
発見子宮がんの追跡調査
(平成12年～15年度)

発行 財団法人 長野県健康づくり事業団
TEL 026-286-6407
FAX 026-286-6412

平成19年2月 発行
